

越路校下の昭和史

激動期の体験記

1984

★青字の文章は、学校の先生方が記載したものです。

兼て、越路校下の歴史を子ども達にわかり易くまとめたい、そんな願いをもっていました。折しも鹿島町史の編纂が進められ、多くの貴重な資料が寄せられています。この機会に、せめて私達の力でできる範囲で校下の歴史をまとめ、こども達の今後の学習資料にしたいものだと考えました。そこで、先ず、昭和の激動期を体験された校下の先輩各位の貴重な体験記をお寄せいただき、越路校下の昭和史の資料としたいとご無理をお願いすることになりました。

お蔭様で、多数の貴重な玉稿をお寄せいただき感謝いたしております。取敢えず玉稿を資料として取りまとめ、職員で手分けして印刷いたしました。

この後、お寄せいただいた玉稿をもとに、時間はかかりますが、越路校下の昭和史（町村合併迄）を作るべく努力したい所存です。今後共よろしくご協力下さいますようお願い申し上げます。なお、印刷の不鮮明なところもあり、読みにくい箇所もあろうかと思いますが、何卒ご許容くださるようお願い申し上げます。

ご寄稿くださいましたことを、重ねて厚く御礼申し上げます。

昭和五十九年十二月

鹿島町立越路小学校長 中橋 達夫

十五年戦争へ

戦争中の生活

第一次世界大戦が終わり、昭和の幕があがるころ、世界はかつてない不景気のあらしにみまわれていました。

日本も例外ではなく、多くの人々が職を失い、東北地方の農村では、まずしさのために、自分の娘さえ売らないと食べていけないありさまでした。

越路地区でも、武部を中心とした養蚕は大打撃をうけ、まゆの値段はそれまでの三分の一にさがり、米の値段も半分以上となりました。そのため、どの家も収入はガタヘりとなり、大変困ってしまいました。

そのころの日本の指導者たちは、どうすることもできなくなった景気を回復するには、中国の広い土地や豊かな資源を手に入れなくてはだめだと考えたのです。

それで、まず満州（今の中国の東北地方）を日本の完全な支配下におこうとして、一九三一年（昭和六）、満州事変をおこしました。続いて、翌一九三二年には上海事変を、一九三七年（昭和十二）から中国との全面戦争を開始しました。

やがて、ドイツ、イタリアと手を組んだ日本は、一九四一年（昭和十六）アメリカやイギリスを相手に、世界をむこうにまわして、太平洋戦争（第二次世界大戦のアジア地域の戦争）をはじめました。

このため、一家の中心となる男の人は、つぎつぎに戦争にとられ、残された家族の苦勞もなみたいていではありませんでした。

敗戦ちかくなると、学校の勉強も中止となり、毎日毎日

が作業で、町も学校も家もすべて戦争のために働かされ、人々は、夜となく昼となく空襲の警戒を告げるサイレンの音におびえていました。

こんな戦争ばかりの世界の中が、一九四五年（昭和二十）八月まで続いたのです。一九三一年の満州事変から数えて、およそ十五年間にもわたる長い戦争でした。

この章にのせてある「二十八編」の体験記録は、このような戦争中（太平洋戦争が中心）の越路のようすをくわしくかいていただいたものです。

戦闘に実際に参加しなくても、戦争が生活のなかに入りこんでくるおそろしさ、きびしさを、一つ一つの文章が、あざやかに語りかけてくれます。

きびしくこわい日々

宮下 せつい（当時二十一歳）

一 苦しく、おそろしかった記憶

戦争・・・こんな言葉を耳にするたびに、私たちのあの苦し
く、おそろしかった記憶がよみがってきます。

学校の生徒は、毎日勉強よりも、山へチョマ草刈りから、運
動場に、イモ、豆、お米のたしになる物を一生けん命に作りま
した。家に帰れば、田畑の手つだい、今の子ども達にくらいべ
ば、かわいそうなものでした。

若い男の人達は、病身でなかったら、皆赤紙が来て、召集さ
れました。それに、十六歳になると、志願募集という事があり、
自らお国のためにと出ていったものでした。

私の主人も、戦地にとられてしまい、家には、男の働き手が
いなくなってしまう、こまったものでした。それでも、田畑に
米、麦、さつまいも、ジャガイモ、豆などをお国のためにと作
りました。よい物は、みな国へおさめてしまい、残ったものは
小さい物しか食べられませんでした。それでも大切にしたもの
でした。

子どもにも十分に食べさせてやれず、苦しいかぎりでした。
節米と言っては、食べざかりのこどもでも、お茶わんに一ぱい
食べると、

「もうこれでよい。兵隊さんにくらべると、ぼくら、まだ良い
方だ。」

と言つてがまんしました。

夜になると、じゃがいもと小麦粉のすいとん、おおきなおな

べでこしらえました。

衣服といったら、昔のもめんの着物でもんぺや防空ずきんを
作り、暑くなるとゆかたをこわして、かんたん服という物を作
りました。粗末な物でしたが、不平を言うものはいませんでした。
色々と工夫したものでした。

二 空襲

いろいろとあった中で、あの空襲も、おそろしい記憶の一つ
でした。B二十九が五機、上空を暗くするほどに通った時のこ
とを今思えば、ぞつとしてしまいます。ある時田んぼで、田の
草刈りの最中に、空襲のサイレンが鳴り、田んぼからとんで上
がり、小川のやなぎの木の下で、身を小さくして震えて見てい
ると、すごい音をたてて、七尾の上空をぐるぐる回って富山の
方へ行きました。

あのおそろしかったこと、一生忘れることができません。

三 いつまでも平和で

あれから長い歳月がすぎた今、平和だなあと思っています。物は
豊富にあり、自由だし、子ども達も伸び伸びと育っている姿を
見て、私達のあとに続く子や孫に、

（いつまでも平和であれ！）

と願わずにはいられません。

★赤紙★

赤紙というのは、召集令状のことで、それが来ると兵隊にいかなければなりません。「○月○日○時、○○連帯へ入隊スベシ。」と赤いうすつぺらい紙に書いてあったので、人々は赤紙とよびました。明治以後の日本では、二十歳以上の男子はすべて兵士になる義務があり、二年間軍隊で訓練を受けました。いつでも召集を受けて兵士になるかくごをしていなければならなかったのです。

激動の昭和初期

卜部 末乃（当時十八歳）

一 その頃日本は

私の生まれは、昭和の初期で、激動の時代であったのです。国内では、昭和七年には若手軍人の爆弾で、犬養首相が暗殺された。次いで同じ年、陸軍の青年将校によって、斉藤内閣の暗殺など、血なまぐさいテロ事件を続発させた後、軍人内閣が出現することになった。

また、外地では、満州事変、上海事変、満州国建設、国際連盟脱退、そして、支那事変へと戦火は拡大、ついに太平洋戦争へとエスカレートして、破局の運命を迎えることになったのです。

二 兄が召集されて

私は、その頃幼少だったので、はっきりした記憶はありませんが、兄が上海事変に参加し、家の中が淋しく、両親が毎日無事との便りを待っていたのを覚えております。

また、昭和十二年支那事変で兄が再び召集され、入隊したことをわすれません。当時、赤紙と言って、召集令状がくれば、指定の場所へ指定の時間に入隊しないと軍事裁判に罰せられたのです。

三 学校では

学校でも勉強はそこそこで、毎日のように出征兵士さんを旗の波で駅まで見送ったものです。

後に残された女、老人は、銃後の守りだと働き手を取られた家庭ではつらい生活をしたものです。

ちまたには、「ぜい沢は敵だ」のスローガンがさけばれ、パーマネットの廃止。男は坊主頭、国民服やモンペ姿の奨励、日の丸弁当の運動が広まって、世をあげての国民精神総動員は、学校教育の中にも移入され、やがて軍歌の響きがちこち聞こえてくるようになったのです。学徒奉仕隊といって軍需品を作っている会社に向いたり、出征兵士の留守家庭へ手伝いに行ったりしたものです。

四 たべものは

農家では、増産がさけばれ、一合でも多く供出するよう、割当数量に達しないと強権発動で、飯米も出さねばならない始末でした。

それで、非農家では配給数量がとぼしく、お米よりも麦、大豆、芋、大根等の方が多い主食をされたものです。それで農家でも銀飯など食べていると、おたがい秘密にしていたものです。また、婦人会として、山へジョウブという木の葉を取りに行き、お米といっしょに炊いた事を覚えております、小学校でも秋には落穂拾いがあり、各々の部落毎に一粒のお米もと集めて、学校で山のごとく積み上げたものです。

砂糖もたばこもみんな配給制で、かぜなどひいて砂糖湯をほしくても家で使つてなくなれば、次の月の配給日まで買えないのです。

給食には、お肉など月に一回も食卓にのればせいぜいでした。子どものオヤツはお米のせんべいを塩味で加工してたくわえてあるのをもらえる程度でした。

五 衣服は古着で

衣類は古着ばかり、モンペを作るのも、古着を改造して着用しました。どんな若い娘でも新品の着物など入手できず、それも切符制度で、家族の人員によって点数がもらえ、呉服屋で引き換えに買ってもらったものです。

本来に、今の時代にくらべると、天国と地獄の差があり、衣食住を見ても、これだけ豊富にある世代に生まれた人々は、品物のありがたさを忘れているような感じがしております。

★銀飯と代用食★

米が不足し、私達がふだん食べているような白米（銀飯）は、戦争中ほとんど食べることができません。一人一日、二合三勺（三百三十グラム）の配給があったが、これではほとんど空腹は満たされず、カボチャ、イモ、スイトンなど、米のかわりになるもの（代用食）をまぜては炊いて食べていました。

（朝）タマネギ、ナスのみそ汁、ナスの塩漬け

（昼）タマネギ、ナスのみそ汁、ゆでナス

（夜）ナス、ネギのしょうゆ汁、ナス煮、ナスの塩漬け

これは、当時の小学生の一日分（九月六日）の食事内容です。

配給生活

曾我 正枝（当時二十二歳）

一 衣料切符制で

衣料切符制になり、五十点だったと思う。反物一反買えば十点、二十点になり、タオル二点とかで、産まれる赤ん坊のおむつは、ゆかたの着物をほぐして作り、すぐに下までぬれるので、ざぶとんを縫うように何枚も重ね、さしこにして作る。洋服は作れないので、標準服モンペ姿になる。

二 米は配給

米は作っても、自由に食べたり、売ったりはできない。

米の配給は、大人一人一日一合五勺、野菜、みそ、しょうゆあらゆる物品は、配給制、米の代わりは、大豆を粉にしたもの。どうして食べてよいやらわからず、だんごにして食べたりすると、夜中に下痢して、一晩中苦しむ。また、その後、真黒の大きなおにぎりのようにしたのを十個余り、これは海藻だったらしい。これはどうしても食べられず、捨ててしまった。

少しでもあき地があれば開こんして、野菜、さつまいもを作り、米を少し入れ、芋ばかりのおかゆを食べ、畑や道ばたにあるズンベラ草を取ってゆで、酢の物にして食べる。

かぜや下痢をすれば、ゴゼンサマ草、ドクダミを取ってきてかげ干しにして煎じて飲み、熱の高い時は、ミミズを足に裏にはり、熱をさます。

人間、生き抜くためにと皆一生けんめいに力を合わせてがん

ばりました。

★配給★

“ほしがりません、勝つまでは”ということで、国民生活は極たんな物不足となっていました。衣料品は一年間二百点でどれだけのものが買えたかという点、

背広（五十点）、着物（四十八点）、フトン（三十六点）、スーツ（二十七点）、ワンピース（十五点）、スカート（十二点）ワイシャツ（十二点）、手袋（五点）、パンツ（四点）、くつ下（二点）といったぐあいで、子どものいる家ではとても足りなくて、古着を作りなおしてきていました。

食べ物も配給だけではとても足りないのです、せまい庭をほりおこして畑を作り、サツマイモやダイズを植えておぎなしました。けれども、米までは作れないので、汽車に乗ったり、バスに乗ったりして農家へ米の買い出しにいったものです。

平和の大切さを

泉 貞則（当時六歳）

一 終戦のころ

終戦時、六歳だった私。四歳の時父の出征で、母と共に、徳田駅まで見送った事、夫を兵隊にとられ、幼児をかかえ飢えながら働きに出なければならぬ母。空襲警報で夜中におこされ防空頭巾をかぶされ、外で夜空を見上げた事、電燈の光が外へもれないように窓に暗幕をはった事。

そして、敗戦。学用品も、お粗末なもので我慢し、不自由ななかで、小学校へ入学したものです。

学校の運動場は畑にされてしまい、本当に悲惨な戦争をしたものだと思うのです。この戦争で犠牲者になった方々は、たくさんおられます。

二 戦争は公害

戦争は、意図がなければできないものです。戦争は人口的に仕込まれたある種の公害なのだと思います。

日本は、世界を相手に理不尽な侵略戦争をしかけ、大犯罪を犯してしまったのではないのでしょうか。

戦争の残酷さ、平和を守るのは私達人間の心と行動だということを知りました。

今の子どもが大きくなるにつれ、戦争のおこる危険も大きくなるのでは、と憂えるですが・・・。

三 体験をきっかけに

ところが、こうした体験をきっかけに家族で平和の事を話し合っ、子ども達にわからせてやるのが、経験した者のつとめではないのでしょうか。

また、核兵器とかミサイルとかいわれ騒がれています。人は自然にはかありません。けれど、戦争にたいしては抵抗できる。

だから、一つ言いたい。「戦争反対」はだれでも言えます。その「反対」は、どうして、と聞かれても、心から思っている説明ができるように勉強したいと思うのです。

すべてが代用品で

能戸 房枝（当時二十歳）

一 もう四十年経った

あの終戦当時の放心状態からもう四十年近く経った。記憶もうすれてしまった。平和のせいだろうか。年のせいだろうか？でも、断片的だが、一つ一つ浮かんでくる。

二 食料も弾丸も代用品

食糧増産の名のもとに、あらゆる土地は耕されて、代用食品のいも等が植えられ、今のようにならざるに夏草など生き茂ってはいなかった。

現在の国道の両端や、家のまわりの少しのすき間にまで、ヒマを植えた。種子をしぼって出た油が飛行機の燃料になるとかで。

だから、戦地の馬の飼料として供出する干草も、山まで刈りに行き、日中干して軽くしておいてから、かついで降りてきた覚えがある。

鉄砲や大砲の弾丸になるとかで、仏壇の仏具や、かやのつり手の金具まで供出した。こんな物まで今から出して、弾丸が間に合うのかしらと思いつながら、夜おそくまで、カンカンたいてとりはずしたものである。

三 女手で消火活動を

働き盛りの男は、次々と戦地へ……。もしもの時に備えて、

女手で消火をと、訓練があった。

今の様な機動的で、科学的なものでは、もちろんあるはずがない。三、四人ずつ向い合って、ヨイシヨイシヨと交互に押し押しポンプである。掛け声も勇ましく？でも、四、五回もするともう息切れ……。勢いよく出た水もほんの五、六秒。いや、三、四秒だったかも。あれで、いざという時に役に立っただろうか。

敵がせめて来たら、竹槍で突いてやつつける等と、本当にアメリカ兵が、目前に迫ってきたら突っこんで行かれただろうか。あんな到底不可能な事をと、今は思えるのだが、あの時はやれるものと、真剣に思っていたのだから不思議である。

四 犠牲者への痛み

戦争には、犠牲が付きものである。あの戦争で、本意ながらかりだされ、散っていった人達が気の毒でたまらない。

我が子、我が孫をあの人達に置き換えて考えた時、胸が痛んで仕方がない。

★空襲★

航空機による空からの攻撃を空襲といいます。アメリカ軍による日本本土空襲が本格的に始まったのは、十九年十一月からで、B二十九による七十機の襲撃を受けました。十二月に入る

と東京だけで、十五回の空襲があり、二日に一回の割合です。
このへんでは、七月二十日に富山市がひどい空襲を受け、二千
人も人が死亡しました。

戦争に勝つために

東 良作（当時二十七歳）

一 勤労奉仕について

戦争当時、国内において連日の様に勤労奉仕といわれる奉仕作業があり、戦闘に出ている以外の人々は、色々な作業に出ました。

神社仏閣の掃除、学校近くの草かり、また、戦地に行っている方の留守家族へ行って、農作業のお手伝いをしたり、戦地へ行ってはいる方々の慰問のための品物を集めたり、その発送作業をしたりしました。

二 配給について

お米をはじめ、食べる物全部、たばこ等、配給といって、日一人いくらという様になんでも配給です。いくらお金があっても、なにも買うことができませんでした。お米は一人二合八勺だったと思います。もちろんそのうちにお米の代用として、イモ、トウモロコシ、麦などなんでも配給でした。タバコは日一人三本くらいだったと思います。

衣服等も配給ですが、これは上層部の人達だけで、私達には一度もあたりませんでした。

また、供出というのがあり、私達は農村にいたので、野菜に供出割当があると、田も畑もないので、山へ行き、フキ、カタハなどをとってきて出しました。何にもないときは、お米の代わりに当たった主食のイモまで出しました。

三 交通の様子

私は、二宮七尾間のバスの運転者をしておりました。一日に八往復でした。バスは代燃車で、ガソリンは無く、代わりに木炭を燃やして、ガスを発生させ、それで走っていました。代燃では力が弱く、ノロノロ運転でした。二宮七尾往復で、木炭が約八キロくらいでした。乗る人達は、七尾へ用事に行かれる方々や、毎日朝夕は軍事工場へ勤める人達で満員でした。

四 食べ物について

毎日、御飯の中には、豆、イモ、カボチャ、野菜、麦、木の葉（ジョウブ）等、必ずお米以外の物を入れたまぜ飯でした。たまに、おかずにお魚が配給になっても、もう悪くなっていて、食べられない様な物でした。なんとか煮たり焼いたりしていただきました。とにかく、どんなにますぐても、子供にだけは腹いっぱい食べさせたいと一生懸命努力するのが親達の勤めでした。

五 衣服について

衣服は、どんな人でも大変貧しい物を着ておりました。全部つぎばかりで、どれが本態かわからない様な野良着（作業服）を着ていました。

六 松根堀りについて

軍隊では、当時、油が不足したので、いなかでは、数年前に切った松の木の株を掘り起こし、それを今の越路農協のところへ集め、大きなかまの中に入れ、むして油を取り出し軍の方へ送ったのです。

七 疎開

大阪方面より、たくさんの児童がお寺や親類に泊まり、通学していました。

★松根油★

日本は船や飛行機を動かす燃料も外国から輸入できなくなり、ついに松根油といって、松の根から採った油を使うほどになりました。蒸してできた油の層によって、飛行機用とか船用とかに分かれたそうです。（今の越路農協の前に松根油をつくる工場がありました。）

一 防空ごう堀り

若い男性は、召集で軍人となり、老人と女性、子供達で国を守っているのです、裏の川土手に、残された女性の手で、家族が入れるだけの横穴式の防空壕を堀り、空襲警報の合図で子供達を避難させ、私達は家を守りました。

二 戦時下の学校生活

学校とは名のみで、鋏、かまを持って山を切り開き、かんしよ（さつまいも）、かぼちゃ、じゃがいも等食料を作るため、一生懸命働きました。野山の草もつみ取り、食用にしました。

学校の運動場も畑に変わり、食事は大根めし、豆めし、ジョウブがゆで、本当にお米を少し入れ、野菜のつなぎに米が入っていたように思います。

今の様に、外国に食料を依存しているような時代の反対ですから、本当に大変で、何もかも自給自足で、おいもさんなんかありがたい主食の一品でした。

三 配給

お米、油、大豆、パンなど、あらゆるものが配給で、一升のお酒も隣り組みまで分け合い、黒パンも食べました。

衣類は点数制でした。私がお嫁に来た時は、となり近所、親

類のみなさんに、点を分けてもらい、点数を持ってお店に買いに行くのです。それも今の品物とは違い、人絹という糸が混ざっており、とても弱くて、めらめらした品でした。

また、男性は活動しやすくつめえりで、女性はモンペ姿が流行し、スカートなんかはく人もなく、頭にパーマをかけると、「スズメの巣」といって、国賊だと、みなよりせめられたくらいです。

四 疎開

親類知人をたよって、都会の子供達や、また親類も一諸にいられた人達が、田舎に集り食料増産に勤めたものでした。

また、山に行き、松の根を堀りおこされた男性もおられました。また、金物は鉄砲にするのだと言って、供出したものでした。

五 空襲

富山県が空襲にあったため、私達のところへもB二十九型戦闘機がたびたび襲来して来ました。私の家では、夜は間だけびょうぶを立て、まっ黒な部屋を作っており、そこに子供達をねかせておりましたが、常に防空壕には、いも類、カンパン等、食料の保存をしておりました。

東京大空襲の翌日、主人が軍人で、千葉の四ツ街道におりま

して、外地に行くとの事で私も面会に行きました。

上野駅の乗り換えのため、下りると階段には死体が折り重なり、夏の事で悪臭がムンムンとしており、ときおり、B二十九の襲来があり、さながら戦場を思わせる様でした。川のほとりでは水をもとめてよりそつと重なり合う、見るも無残な光景をまのあたりに見て来ました。本当に戦争はこわいです。二度とあつてはいけないと思います。

★防空ごう★

敵の空襲が激しくなってくると、家や学校のまわりに防空ごうをつくりました。

大きなあなをほって、そのまわりに土を高く盛ったものや、山やがけを利用した横穴式のもの、また、家の床下につくったものもありました。

戦争一色

大和 ゆ里子

昭和十二年、私が小学校一年生に入学した七月、支那事変が勃発し、私の父も出征しました。

今日も明日も、出征軍人を良川駅、または徳田駅へと、「勝つて来るぞと勇ましく・・・」「見よ東海の空明けて・・・」と、日の丸の旗を振って送りました。また、「武運長久」の祈願にと神社にも詣でました。

私達小学生の作文や絵等を入れて、婦人会の方々が慰問袋を作っておられました。戦死者も出るようになり、遺骨を迎えるに出ることもしばしばでした。

非常時来たれりと、やがて満州へ渡る方々がありました。

昭和十六年十二月八日、私達が五年生の冬、大東亜戦争が始まり、時局は戦争一色となり、学芸会などにも戦争物が取り入れられ、体育の授業は教連が取り入れられ、絵の時間には戦争の様子等を書き、戦勝を一途に信じていました。当時の高等科二年生の男子の中には、満蒙開拓義勇軍という名で満州へ渡る人達も出て来ました。

ラジオでは、毎日軍艦マーチが流され、我が国の勝利が放送されて、敗戦等、夢みることとてありませんでしたが、やがて、物資が不足するにつれて、「ほしがりません。勝つまでは。」と、標語をはりつけては、がまんと節約の生活が続きました。

そのころ小学校の一室に奉安室が設けられ、日清戦争以来の戦死者の写真を飾り、国の礎となられた尊い命に感謝をし、花を飾りました。大きな教室には五十数名の子供達でぎっしりつまり、弁当は梅干しだけで日の丸弁当でした。衣料も食料も

不足して、忍耐の毎日でした。

現在の生活は、あらゆる面で豊かに満たされていて、物に不足することもなく、がまんする精神も持たない生活のように感じます。今日の生活を築きあげて来るまでに、大きな犠牲があったことを忘れることなく、過去の体験を思い出し、語りつがれていくことにより、自分達の生まれた国を愛し、より良い社会と国民性を築き上げていけるものと思います。

★満蒙開拓青少年義勇軍★

日本の政府は満州国をつくり、貧しい農民を村ごと満州に送り込む計画をたてた。

一九三八年からは、十六歳以上十九歳までの若者も満州に送りました。これが満州開拓青少年義勇軍です。志願した大部分は地方の貧しい農家の子供達でした。

鹿島町でも高等科を卒業した人達が志願していましたが、その志願も人数当てが半強制的になり、初等科（今の小学校）の卒業の前にもう応募が決められていました。越路小の場合、昭和十二年から二十年までに、二十数名が満州に渡りました。

しかし、少年達を待っていたものは、寒くこごえるような大地と、土地を奪われた中国人達の憎しみの目でした。ソ連と満州の国境近くの開拓団に配属された彼らは、大戦末期のソ連の対日参戦の犠牲となり、二万三千人のうち、生きて日本に帰った者は、一万三千人足らずでした。

一 戦時下の学校生活

昭和八、九年生まれの方等は、学校には行くが、そのあとすぐ、今の徳田駅付近の軍事工場へ戦争に使う武器作り行ったり、石動山へすみ俵をかつぎに行ったりしました。

五、六年の高学年は二俵ぐらいかついで、里へ六キロメートルの道のりをじやり道で、わらで編んだぞうりをはいて頑張りました。

学校でも畑を作り、じゃがいもやさつまいも等を植え、食料の足しにした。

勉強は一週間に二日ほどしていたそうです。

昭和十六年四月、小学校は国民学校に改名されました。生徒児童に対し、個性を伸ばす教育は、反国家的教育としりぞけられ、すべてが軍隊における兵士の訓育と同じ覚悟で生徒児童に對することを要求されました。

二 防空ごう堀り

越路でも小さな家族だけで入る防空ごうはあっちこっちに見られたが、大きいものは、昭和十九年に二宮の中村歯科さんの屋敷に三十人ほど入れる、班としての防空ごうが掘られ、一、二回入ったそうです。あとは、終戦まで大切な物を保管していたとのこと。

穴は二、三段ほど階段をつけて、横に長くドアは土で出来て

いて、穴の上には敵に感ずかれないようにと草でおおったり、雑木をおいたりしていました。当時の知恵でしょう。

三 勤勞奉仕

どこの地方や部落に行っても同じような仕事をしていました。山へたきもんや杉葉をたばね、かついで道ばたまで出す仕事です。

また、部落総出で、それぞれお寺の奥さんも財閥の奥さんも区別なく、神社の清掃や戦争に出た家へ稲刈りの手伝い、すみかつぎ等と、お国のために、戦争に出ておいでる人のためにと、小さい子供を家のおいででも、命令のある日は必ず出なければいけなかったのです。大麦や小麦、じゃがいも、さつまいもを作り、供出することも勤勞奉仕でした。

四 配給

昭和十六年四月から米をもらうための米穀配給通帳制ができました。配給の量は一日標準三百三十グラム（二合三勺）で、はじめ七分づき玄米に近く、昭和十七年秋から五分づきになり、十八年一月には二分づきになった。

ろうそく、マッチ、ざらめ砂糖、ごぎ、ぼうし、長ぐつ、地下たび、食べられないような真黒のだんご、麦、石けん、役場から部落の隣保班にふだを渡し、くじびきをしたり、各班へ

配ったりしました。

五 食べ物

雑炊と粥、かぼちや御飯（米五合に、かぼちや普通の大きさ
一個入れたもの）さつまいも、じゃがいも、豆の入った御飯や
かゆ、三分がゆ、五分がゆ、大麦の皮をむいて御飯に入れたも
の、大根めし（これは消化が良くて腹がへって困った）かぼち
やの種をとって炒めて食べる。すいとんとは小麦粉をこねて丸
めた団子を実として作る汁のこと。いもの茎。田んぼのあぜ、
せりやのびる。山のぜんまい。わらび、ぎょうぶの葉（ゆでて
干して食べる時のもどして、あわが出るのを何回も洗い、御飯
に入れて炊いた）。その後、桜の葉に似た葉っぱなど、何でも食
糧にしていたのです。

※家のおばあちゃんや近所の人、家に来て下さるお客さんに教
えて頂きました。

★隣保班とは★

となり組ともいいます。町内のとなりどうし十軒ほどで作ら
れていました。そして、月に何度か会合を開き、生活物資の配
合、不用品の供出、出征兵士の見送り、防空演習などについて
話し合い、そこできまったことを実行しました。

回覧板は、それを知らせるためにそれぞれの家に回される伝
言板のことです。

苦しい生活

朝倉 由男（当時二十九歳）

一 戦時下の学校生活

高学年の生徒は、近くの航空会社での仕事の手伝いをすることも多く、また、勉強の合間に先生の引率で、奥山の炭焼き小屋から炭俵を背負い、里の倉庫に運ぶなど、勉強する時間も少なかった。

二 防空ごう

家のまわりの空地や部落内の空地、または近くの山の斜面など、近所の人達が共同で大きなあなを掘り、丸太などを渡し、その上に土をかぶせ、草木などを植え、防空ごうを作った。

三 勤労奉仕

戦争に行かれた兵隊さんの留守家庭に出かけ、田んぼや畑、または山仕事など、共同作業の手伝いをした。

冬になって、雪が降れば、屋根の雪おろしなどをし、男手のない留守家庭を守った。

四 交通

戦争がながびくにつれ、油、石炭など燃料がなくなってくるので、汽車に乗るにもキップは予約割当てで、客車の数も少なく、

貨物列車や石炭車の上に乗せられた。

また、自動車、バスなどもガソリンが配給で足りないので、木炭車が煙をはいて走った。

五 配給、食べ物、衣類

各部落ごとに、十戸単位で、隣組（隣保班）制がつけられ、食物、衣類、日用品など、生活物資は全て配給制になり、家族の人数の割当てで分配された。たとえば、マッチなども一人当たり何本ずつと数をよんで分け与えられた。

★アメリカやイギリスのことばは使うな！★

鉛筆のHは硬、Bは軟といました。みんながよく使うHBは中庸（ちゆうよう）ちようどよい）ときざまれました。鉛筆もノートも質がよくないので、ノートがよく破れました。

六 松根掘り

戦争がながびくと、日本にも油がだんだん少なくなり、町や村に松の根から油を取ることが考えられました。残っている男たちに、山から松の根を掘り出して供出する様いわれ、一戸当たり何十貫と割り当てられました。山へ行って掘り出し、供出することも大変な仕事であった。

山の中の防空ごう

松永 利男

七 開こん

家のまわりの空地、川の堤防、道路わきの草むらなど、どんな小さくせまいところでも空地には、豆や小豆、野菜などが作られた。近くの山なども傾斜のゆるいところなども開こんされて、大豆、小豆、そばなどが作付けられた。

八 疎開

戦争が激しくなり、都会の方は敵の空襲であぶなくなつてくるので、老人や子どもたちは少しでも安全な場所へと、もよりのいなかの方へ移動した。

両親や兄弟と別れ、集団で遠く離れた草深いいなかのお寺や集会所に託され、戦争の終るのを待っていた、幼い子供達のことかと思ひ出されます。

九 終戦後の生活

ようやく戦争が終わつたけれど、戦争中には、生活必需品はほとんど作られていなかったため、物がなく、配給品も少なかった。物価もやみ値といって、どんどん高くなり、とくに食べる物の不足は何よりもつらく、野や山へ出かけて、食べても毒にならぬものならなんでも取ってくるといった苦しい生活が数年続いたことが思ひ出されます。

越路小学校プールの後ろに見える小さな山小屋についての思ひ出を記したいと思います。

昭和十八年以降米国のB二十九の爆撃が数回に渡つての東京大空襲を初め、全国主要都市を次から次からと襲い、日を追つて激しくなつていきました。

銃後の国民皆は、全国土の家屋が灰になるまで戦い抜く決意でいました。もしもの場合、先ず食糧が一番大切なため、みなさんそれぞれ防空ごうなどを掘つて分けてあつたものです。

あの小さな山小屋は、山の中なら心配いらないと思ひ、白米、梅干、漬物、および大切なものを分けておくために建てたものです。

一メートル程穴を掘つてあるので、梅雨の時など湿気をよんで、米にかびがはえたこともあり、この小屋を見るにつけ、時々、当時のいろいろな苦勞をしたことが思ひだされます。

第二次世界大戦を思ひ出される大切な遺物ではないかと思つています。

なお、現在は、全部杉の木を植林してありますが、終戦後は食糧不足で、下の平地は田地にし、米をつくり、畑地には甘しよを二千本ほど植え、上の山も雑木等を切り、開墾し甘しよやかぼちゃなどを植え、食糧の足しにしたものです。

ほしがりません。勝つまでは。

延命 静枝

旧のお盆がくると、思い出さるのは、昭和二十年の終戦の日である。あれから約四十年。当時、銃後を守り、苦労された方たちも少なくなられた。今は、あの悲惨な戦争を知らない、のびのびした子どもたちばかりでほんとうにありがたいことだと思う。

あの頃の山、川、田の風景も面影がなくなり、特に良くなったのは、道路でしょうか。年月の流れを物語っています。

「ほしがりません。勝つまでは。」の標語のもとに、毎日の食事も、いも、菜が多くて、米は少しまじっている程度。それも腹いっぱい食べられずに。着物は、古物の作りかえや、破れたのは当て布をして。糸や針までが配給。何もかも配給制度が続いていた。

また、硝子には、紙テープを張り、夜になればあかりがもれぬように、黒布をかぶせて、夜業、勉強をしたもので、敵機がくると、皆外に出て飛行機の音がしなくなるまで、家族近所の人たちが一緒にいたが、ほんとうにおそろしかった。

子どもといえども、皆、学校から帰ると、家の手伝いで頑張っていた。大人の男たちは、召集令状で現地へ。銃後は、老人、女、子ども、体の弱い人で守っていた。

米は供出。割り当てで出荷。その他の勤労奉仕、松根油を取るための根株堀り、馬のえさのチョマの乾燥したのを出したり、鉄や銅で作った品物仏具まで出して、あれもこれも、お国のためにと、一丸となって頑張った。

最後の頃には、敵の飛行機が日本に潜入。空襲で東京をはじ

め、あちこちが焼かれ、福井も焼かれ、富山ももえて、あの時の東京の山の空が真赤になったのを今も覚えている。村にも軍服を着た兵隊たちが何をしているのかよく出入りし、ジープも走るようになり何か心細い毎日で、子どもたちは、防空頭巾をつけ、大人も大半は、綿の入った頭巾を持ち歩き、万に備えていた。しかし、石川県は燃えずにすみ、よかった。広島のようになっていたら、どうしていたことでしょう。

八月十五日、天皇陛下の御言葉と共に、終戦。日本の負けを聞いたとき、皆力が抜け、これからどうなることかと不安がいっぱい。軍服の兵も、いつのまにかいなくなり、淋しい夜を迎えたことを覚えていた。

でも、食糧事情が楽になるまでは、なかなかたいへんなことで、町からよく食べ物を買いに来ていた。

勝ちぬくために、私も鉄砲をうつこと、竹槍を持つことを覚えた。

今でも思い出すのは、今の白山公民館になるでしょうか。当時の白山塾で、真冬の一週間、練成講習会があった。

雪が屋根まで届いているような朝、五時に太鼓の音で起床、五分程で三十人の女性が禊に出る、初日は、乾いたエプロンだったのが、二日目からは、こおって棒になっているのを火鉢の火にかざしてやわらかくし、素肌につかけて禊場に走り、水槽の水を手桶でくんで、エイツ、エイツと肩から水をかけること数分。氷のような冷たさに、無我夢中の毎朝の行事でした。

また、満蒙開拓軍の花嫁講習も受けさせられました。今でも

戦争中のくらし

馬村 直栄

あの時、渡満していたらどうなっていたらと思う。

以前、二十回余りで発表された満渡の方たちの帰国の苦勞の記事が新聞に出、読みながら敗戦国のみじめさを痛感させられました。

衣食住に恵まれた今、戦争は遠くなりましたが、傷跡として残りました、広島、長崎の原爆如きが、二度となきことを祈ります。

一 食べもの

大豆ご飯、さつまいもご飯、かぼちやご飯、ジヨブご飯（木の葉）

山へよく取りに行きました。今では家のまわりは、花ばかり植えてありますが、当時は、ちよつとした空地にでも、かぼちや、いも、豆など食べるものばかり植えてありました。

二 衣服

なんでも古着もほぐして標準服を作りました。

三 防空ごう

やしきに、共同して防空ごうを堀り、何でもそこへ入れました。空襲ともなれば、家の電燈を全部消して真暗にしました。小さい子どものなくのに、たいへんこまりました。

戦時中の食生活

奥 菊乃（五十九歳）

戦時中の食生活のお話は、遠い昔話のようです。恵まれすぎた現代の食生活は、昔のおばあちゃんが見ると罰が当たると言われそうです。私は、農家の長女として生まれました。

この頃は、「産めよ、殖やせよ、健やかに。」の世代で、母は国策にそって、たくさんの子宝に恵まれ、弟や妹が次々に生まれました。

私は、姉で、いつも子もり役でした。背中に赤ん坊をおんぶしては、本を読み、目を赤くして勉強したものです。

農家に生まれても、戦争がはげしくなるにつれ、食生活が、だんだん苦しくなりました。

作った米は、供出米として出し、残った保有米だけでは、育ち盛りの子どもが大勢で、足りません。そこで代用食として、いもがゆ、かぼちやがゆ、だんごがゆ、いもごはん、よもぎごはん、豆ごはん、麦ごはん。白いごはんは、口にはいりませんでした。朝はいつもいもごはんでした。おいもにごはんがばらついていて、いもだらけごはんでした。夜は、くず米のだんごがゆです。そんな大きなおかゆなべをまん中に、大勢の子どもが丸く輪になってきちんとおすわりして、みんな舌づつみをうって食べました。そのだんごがゆの味が今、なつかしく思い出されます。私は、おかわりをしたくてもがまんして、弟や妹たちに食べさせました。弟や妹たちも、私の心中をわかってくれたでしょう。今、聞いてみると、何と答えるでしょう。

祖母は、毎日、くず米を引き、うすで粉引きするのが日課のようでした。だんごを作っておかゆに入れたり、よもぎを入れ

てよもぎだんごを作り、きな粉をつけてくれたときは、今のケーキでも食べるように、おいしかったです。

母は弁当をつめるとき、おいしいところを四角い弁当箱につめ、まん中に赤い梅干しを一つポンと入れてくれました。これが本物の日の丸弁当です。苦しい中から、おいしいもの入らない弁当をもらったあの頃を思い出すと、涙がでます。

私の母は、涙ながらに話してくれます。あのひどい戦時中、親が子どもを育てたのではない。お前たちが育てくれたのだと。

あの暗く苦しい戦中戦後を生き抜くことができたのは、両親の限らない深い愛情と、食は貧しくとも、和やかな家族愛があったればこそと思いい、この年になっても感謝の気持ちでいっぱいです。いつの時代でも、親の愛は、筆舌につくしがたい尊いものがあると思います。

おかげさまで、私の両親は健在です。

「山より高い父の恩、海より深い母の愛」

お父さん

お母さん

ありがとう

★うめよ ふやせよ★

戦争に行く男の人たちが少なくなり、昭和十四年「うめよ、ふやせよ、すこやかに」というスローガンが、かかげられました。男は兵隊に、女は兵隊をうむ道具として扱われました。

十三人もの子どもに恵まれた家族は、表彰されました。

私の戦争当時

島田 勝彦（当時七歳）

終戦が、私の小学校一年のときでした。戦争のことはだいたい覚えていません。

学校へ行くとき、防空頭巾をかならず持って行くかなければならなかったのです。

授業中B二十九の米軍機が音をたてて飛んでくると、すぐ横にあつた山の中の防空ごうの中に、防空頭巾をかぶって逃げこみました。空を見ると悠々とB二十九が飛んでいるのです。

家にいるときも、空襲警報が発令されると、すぐ防空ごうの中に入ったり、雨戸を下げたり、電球の光が外にもれないように、ジャバラ式のかさを下げたりしたものです。

当時の食べ物と言えば、いものつるやいもごはん、豆が主食でした。それでも、当時はいやなことはありませんでした。

その当時の子どもの遊びといえば、男の子は、チャンバラごっこ、石けり、開戦など。女の子は、お手玉、なわとび、おはじきなどでした。

衣服などもあまりなく、つぎをしては、着ていました。

物がない時代でしたので、なんでも配給でした。学校でも外ばき、内ばきなどの靴も配給でした。

私の家は、学校のすぐ近くだったので、良く覚えていきます。朝早く起床ラップが鳴り、大人の人が、学校でわら人形を竹槍で突く訓練をしていました。

赤紙と言って、召集令状がくると、戦争に行かなければなりませんでした。その見送りを、親戚の人や近所の人が駅までしにいったことを覚えていきます。

終戦間近に隣の富山県が空襲されているとき、私の家から山の向こう側が夜なのに昼のように明るくなって、真赤に焼けていたのが今だに瞼の裏に強く焼きついてはなれません。おそろしかったです。何人もの人々が死んでいく残酷な戦争だけに、ぜったいにしないでほしいと、子ども心にもいつも思い続けていました。

★竹槍★

竹で作られた槍です。戦地へ行かない女の子や女子学生が、敵がやってきたときには、この竹槍でやっつけようとしてました。

イギリスやアメリカの大統領の姿をわら人形に表し、つきさす訓練をしました。

勝利の日までと

田中 与平

昭和十二年七月七日、支那事変が始まる。

小学六年生であった。

近所や親戚の男の人に、召集令状が来て、兵隊に行く人を良川の駅まで、「天に代わりて不義を打つ」の軍歌をうたい、日の丸の小旗を持って送りに行った。

また、戦死した兵隊さんの遺骨を、「海ゆかば みづくかばね山ゆかば 草むすかばね」と、良川駅へ迎えに行った。

南京陥落で、昼は旗行列、夜は提灯行列をして祝った。

昭和十六年十二月八日未明、ハワイの真珠湾を攻撃。そして、米英相手の戦争の詔書が下り、この日一日中ラジオで臨時ニュースが伝えられ、挙国一致、国民皆戦争の気持ちになり、何とか勝利の日まで頑張ることを誓った。

学校は、毎日軍事訓練をし、英国の勉強は敵国語であるからと、正課としなくなった。

食糧は、兵隊さんに充分に食べてもらうようにと統制となり、米の配給は、一人一日二合八勺に、銃後の者は我慢しなければならなくなり、タバコも配給となる。さつまいも、じゃがいも、大豆等が米の代わりに配給された。田んぼを作っている人も、取れた米やいもすべて供出して、配給をもらっていた。山から取ってきたじょうぶという葉をまぜた御飯も食べた。

隣組として、班毎に空地で、防空ごうも作った。

昭和十八年十二月末、何とかお国のために役にたちたいと思いい、特攻隊に志願して入隊する。瀬戸内海の小さな島で、五人乗り特殊戦攻艇に訓練する。広島原爆も、火薬庫の爆発では

ないかと基地より眺めていた。突撃の順番も、二十年九月に予定されていたが、八月十五日に、終戦と連絡を受けて、うそでないかと思った。

八月二十三日、家に帰る。

★特攻隊★

太平洋戦争の敗北が明らかになった一九四四（昭和十九）年十月、日本軍は、爆薬をつんだ飛行機を人間が操縦したまま、敵の艦船に体当たりする方法をとりました。これが特別攻撃隊Ⅱ特攻隊です。特攻隊員の多くは、二十歳前の若い青年たち（学徒兵）でした。

また、魚雷を人間が操縦して、敵の船に体当たりする回天という方法もありました。

がまんとおそろしい音

広瀬 よしの（当時二十一歳）

戦争当時は、着る物がなくて衣類の点数で、物を買った。点数とは、衣類のこと。そのチケツトがなければ衣類は買えなかった。

配給の中には、たばこ、パン、酒などがありました。

食べものは、お米などとても供出米がひどく、全部出してしまいました。それで、いもなどでおかいさんを作り、また、ごはんにじょうぶなどを入れて食べました。

開くんは、今の越路小学校がたっているところがほとんど。じゃがいも、さつまいもが植えられていました。山でも、木をおこしたりひらいたりして、じゃがいもやさつまいもが植えられていました。

夜になると、「空襲警報」と、となり組の班長さんが、B二十九の飛んでくるのを伝えるにこられると、電燈のまわりに黒い長い袋をかぶせて、外へ光をもれないように一生けん命つとめていました。そして、敵の飛行機が来るかと思つてびくびくして、その気持ちは、何と言ひ表したらいいのかわかりません。とにかく恐ろしかった。

ラジオで、天皇の放送を聞いた時は、とてもなさけないと思ひ、またくやしかったです。

ガラスに紙テープを。

本橋 雄次郎

一 空襲に備えて

家の内も外もガラスはみな紙テープをはり、バクダンで家がこわれてもガラスがこなごなにならないようにしました。

窓には、黒のカーテンをして、電気は布でかさをつくり、警報のサイレンがなると、黒い布をさげ、外からは家の中は暗いのですが、電気の下だけは、明るいのです。

子どもが外へ出るときは、防空ずきんをしていました。高い所から物が落ちてきてけがをしないようにです。

二 食べ物

米、魚、砂糖、いも、すべて配給でした。

班に分かれていて、班へ配給がくると、くじびきで食べ物を分けるのです。ねぎも何本かを班の人でくじびきで分けてました。たべものが少ないので、野路に行き、野草を取つてきて食べました。

ごはんなどは食べられず、ほとんどぞうすいかじゃがいもかゆでした。

三 服ぞう

女は、モンペをはいていました。

男の人は、国民服といって、兵隊のような服を着て、足には

戦時中の生活体験

沢井 政喜（当時三十歳）

きやはん（ゲートル）をまいていました。

★昭和十五年に国民服令がだされ、女子はモンペの上下が、式服として制定されました。

蚕から繭を商売している中、十二年に支那事変が起こり、だんだんとその仕事もできなくなりました。

軍需工場へ行き、飛行機の上下の舵をする桁組み立て、そのほか部品づくり等に専念した。女学校からもたくさん応援隊が来て作業するようになり、婦人会の人たちは毎日のように、兵隊さんを見送りに良川駅へ出かけた。

食べ物は、ほとんど配給。一例として、米一人一日一合から一合半しか当たらないため、イモ、木の実等を入れて主食とした。

農家の人も自分で作った米、イモ類を一応全部提出して、配給を受けたようです。

衣服等も、もちろん配給制で一人何点と点数で当たり、必需品であっても買うことが出来なかったりした。ゆかたを別の物に作り直して利用する人は、少なくなかったと思う。

そのほか、動員がきて兵隊として行かなければならないのに、汽車の切符が手に入らないといった現状でした。

毎日大変な生活が続いた中、二十年八月三日、富山県が爆撃され、夜だったために、自分の家の後ろが燃えているように見えしました。

戦争ほど怖いものはない

前田 惣一

戦争は、まことに恐ろしいものです。

毎日、軍人さんが死んだという公報が入りました。動員がきたり、家においても仕事も手につかず、暗い毎を送りました。

夜になると、電気もみんな消してしまいました。また、幕をつくったりして、夜の明けるのを待っていました。

家の弟も戦地に行き、九年六カ月帰ってきませんでした。

北支、南支、ビルマ、シヤムと世界中に行き、まことにつらい思いで、戦ってきました。その間に、父も母も皆死んでしまいました。

今となれば、戦争ほど恐ろしいものはありません。

私の村にも死んだ軍人は、十一人。その親たちは、毎日毎日泣いていました。

そのときは、食べものはないし、着る物もなく、まことに困りました。

また、仕事をするのにも道具はないし、まことにつまらなかつた。また、家にいた馬もとられました。

食べものと空襲

島 きみ枝（当時十八歳）

一 食べもの

戦地へ米を送るためでしょう。供出がきびしくて、二町歩に近い田を作りながら、夜になると、赤いご飯にキャベツ、じゃがいもをいっぱい入れておじやにして、八人家族の空腹をみたしました。さつまいもを入れておじやにしたり、田を作りながらこんなのかと、つくづく思いました。

道のへりに生えているおおぼこなどが、食用になると知ったのは、その頃でした。

二 空襲

「警戒警報、警戒警報」とさけびながら廻る人の声がすると、いちはやく電気の灯が外にもれないようにして、息をひそめていた。めったにない空襲警報になって、飛行機の音がするので、外に出てみると、B二十九がカランカランと音をたてて、長い尾をひいてゆうゆうと通って行きました。

なぜ、あれをうち落とされないので不思議に思いました。

お国のためにと、

吉岡 好子

一 出征軍人のお見送り

六年生の頃は、戦地に出征なさる軍人さんを駅までお見送りに行きました。

「天に代わりて 不義をうつ・・・」

「勝つてくるぞと 勇ましく・・・」

「我が大君に 召されたる・・・」

今もなお、あの頃の軍人さんやお家の方々のお顔が、目のあたりにはちらつき、軍歌を小さな声で口ずさむときもあります。

二 防空ごう

私供の土地ではありませんが、空襲の時はいつでも逃げられるように、帯芯でカバンを作り、少しばかりのお米とおしめ等を入れて、防空帽といっしょにまとめました。

三 勤労奉仕

チヨマといって、強い繊維のある植物を刈り取って、なわをぬったり、根は株分けをして植えたこともあります。

戦地のためにと、干草のわり当てを受けたこともあり、少しでも色のいいものに仕上げたいと、草の刈り取りをしました。

松根油を作るために、男の人は、松根を掘り起し、私共は、カマスに入れてかついだこともあります。

四 配給

それはそれは、今の子どもたちに話しても信じられないことばかりです。日用品、食品など、わずかの配分でまかないました。どんなにまづい物でも工夫して食べました。今もなお、物を大切にするといい気持ちは捨て切れずにいます。

五 工場動員

あの頃のお子さんは、もう五十歳を過ぎていらつしやると思っています。男の子は、丸ぼうず、女の子は、おかつば姿で、飛行機の部品づくりでした。お国のために、若いも若きもありませんでした。

戦時のくらし

能戸 せつ

昭和十二年に支那事変に行つて、支那の上海に二年いた。家にもどつて二年ほどおり、又、スマトラに六年間。スマトラでの戦争は負けだった。昭和二十二年に負けて帰つてきた。

スマトラにいた時は、警備などもしていた。その時は、何も食べるものがなく、スマトラの住民に残つた物をもらつては食べた。ヘビとかねずみなども食べた。家に残っている人達も木の葉や、草などを食べた。アメリカから送つてきた粉みたいな物は、のどに通らなかつたが何も食べるものがないので、がまんして食べた。

大東亜戦争の時に鉄砲のたま等を作るのに仏具等をみんな取られたので、仏具を出した者に表彰があつた。

支那事変にいつていた時は、戦友が死んだら自分でやいて処分した。

戦争にいつている間一銭もお金が入らず、子供の服などは、みんな親の着物をこわして着せた。

家に残っている者はみんな力であわせて田畑を作つて生活を送つていた。

戦争のこと

古沢 清（明治四十三年生）

戦争にいく人は、こくぼう色の服を着て足にゲートルを巻いてか靴をはいて、鉄砲を持つて戦争に出かけた。その時の若い男の人は、毎日戦争の訓練をしていた。

女の人は軍需工場に働いていた。その時の生活はまずしくて、食べ物もあまりなくて、野菜がたくさん入つていたおかゆや芋や麦めしなどを食べて、あまりおいしい御飯がたべられなかつた。

洗たくは川へいつて洗つていた。

空襲になると窓のカーテンをしめて家を暗くして、防空ごうの中に入つてかくれたりした。

戦争に行つたのは、内地きんむや、外地きんむにいつた人がいて、国を守つていた。

広島原爆にあつて、隊長の命令で逃げる人やたくさんの人がなくなつて、やけ野原になつた。つぎの国を守るために八本町に軍隊が集まつて、広島のとかつづけをしたり、死人のあとかつづけをする人がいた。

原爆にあつてから一週間たつたないうちに、日本が負けた知らせを知つた。それで家に帰り田畑の仕事をしようになつた。

勝つまではと

細川 千代（当時三十九歳）

大東亜戦争で私の兄弟を戦場へ送り、弟は戦死。私の息子長男は名古屋の通信兵に入りました。

夜は、B二十九がくるから電気を暗くし、昼は勤労奉仕にはげみ、食事といえはお米は配給又は、お米のかわりとして、大豆、じゃが芋等食べ物は、いっさいみそ、しょうゆにいたるまで着物、石けん、はき物までが、みな配給でした。

学生さんは、草刈り、炭かつぎ、チョマ刈り。勉強はできないくらいでした。それでもほしがりません勝つまではと、皆協力したのです。それからみれば、今の子供達は幸福、幸福でなんといつていいかわかりません。

このように、恵まれた世の中に生まれてきたのですから、先生、父母、お友達の良い教えをきいて良い人間になろうではありませんか。

夏祭もふきとんで

池田 みゆき（大正十五年生）

昭和十二年七月七日、日支事変が起こり、二十七の夜、夏祭りに踊りで楽しくしている時「ドン、ドン。」と終わりの合図の太鼓がなりました。召集令状がきたのでした。それから毎日のように「出征兵士、ばんざい。」と良川の駅まで送りました。女の人達は千人針を縫うのをお願いし、出征される兵隊に持たせるのです。家に一番力のあるお父さんが兵隊に行くので田の仕事、色んな事で残った家族の手が足りません。学校から帰ると、今日はこの家、明日はこの家と勤労奉仕をしました。

着る物も動きやすいようにモンペをはいた先生を見て皆おかしいと笑いました。

山へ松根掘り。チョマといって繊維になる草、一メートル程にのびた野生を山へ刈に行きました。また、戦地へ慰問袋を送りました。

その中には、みんなで書いた便り、飴、折紙、下着、人形など心をこめて入れました。なれない戦地の兵隊さんは、氷点下三十度の寒さにあい、体がこわばる事もあり、また、雨の降る中いく日も野宿をして寒いので体と体をくっつけて寝た。あした体温が下がり肩身が動かなくなっていたり、暑い夏にはマラリヤといい伝染病になる人もあり、また、水の中に幾日もつかっていたり、敵との戦いになると大事な戦友が次から次へと死んでいきます。その時の歌った歌がいろいろあります。赤十字看護婦も戦地へどんどん行きました。きずついた兵隊野戦病院、テントの中での看病です。かいがいしく働きました。

昭和十六年十二月八日、世界大戦争。アメリカを相手に真珠

湾攻撃。太平洋のどまん中にはなばなく始まりました。フィリピン、ラバウルと次から次と攻撃。日本では

「勝つたぞ、ばんざい。」
と毎日のように勝利をあげておりました。その頃になると食べ物、着る物みんな不自由になり、お店には品物がなくなり、配給制になり、お米は通帳に一人分何合ときめられ、砂糖、しょう油はお店の前に長い列を作り、すこしずつ買いました。

軍需工場がどんどん出来て働かれる者は、皆、動員されました。学生も小学五年生頃から軍需工場に行き、勉強も働いた残りの時間でしました。敵が上陸して来た時の身がまえとして、竹ヤリを作り、また身を守るため防空壕を掘り、大事な物は、そこへ入れました。戦争がだんだん悪化して来る。空襲警報と、サイレンが鳴り、いっせいに電気を暗くして、警報解除になると、やれやれと安心しました。

町の方から、学童疎開、お寺などを借りて勉強しました。村の子供とあまり遊ぶことがありませんでした。田舎にしんせきのある人等、母と子供とあまり遊ぶことがありませんでした。田舎にしんせきのある人等、母と子供が疎開して来て、友達になつて遊びました。そのうち、おきなわとの戦争苦戦苦勝の情報を聞きました。日本がわは勝つと信じました。

東京、大阪、広島、どんどん空襲され、焼け野原になつていきました。母と子と散り散りになり、痛ましい毎日が続きました。

昭和二十年八月六日広島原爆。何が何だかわからない中に八

月十五日の正午、天皇陛下の勅叙があり、終戦を知らされました。

長い長い戦争、お国のためと命を奉げた人を思い、涙がとめどなくあふれました。

汽車に乗った時、軍服を着た兵隊が泣いているのを見ました。いろいろなデマもあったりして、だんだん平和がもどってききました。

たのしんで来たあの日

敞田 文子（七十四歳）

昭和十二年八月二十六日頃、私宅へも赤紙がきました。八月三十一日金沢の第七連隊に入隊しなければなりません。

当時私達国防婦人会は、三日あけず出征兵士を駅まで送り出しておりました。（日の丸の手旗を持って）

私は、ちょうどその頃洋裁をしていましたので、毎日のように呉服屋により、二百枚、三百枚と手旗を作る注文を受けて作っておりました。

国防婦人会の制度は、白いカッポー着で、白いたすきに大日本国防婦人会と書いたものをかけておりました。

出征兵士が「何時に出る」と区長さんより通知があれば家にいる者は、残らず日の丸の旗を持って宮に集り、出征兵士を送る壮行会をし、区長さんより

「しつかり戦って来て下さい。留守宅は皆で守りますから心のこしなく安心してお国の為に働いて下さい。」

と挨拶すれば、

「喜んで天皇陛下の御為、お国の為に戦ってきますから、残してゆく年寄と妻、子供の事は、くれぐれもよろしくお願いしませ。」

とばんざいが三唱されて、兵士を先頭に皆、ぞろぞろと手旗を持って歩いて徳田駅へ送ったものでした。

私も主人が軍服を着て、出る後に夏のろ紋附を着て、うつむいてしたがいて駅へいきました。顔を上げると涙が頬を伝うのが見られるからうつむいてばかりいました。

私は、当時二十七歳で六歳を頭に四歳、二歳と三人の子供を

残していられる事は心細くありましたが、皆どの家も働き盛りの若い者が兵隊にとられて残るは、老人と子供ばかりでした。

主人は、北支へ派遣され、丸三年と二カ月にやっと帰ってきましたが私の弟（藤沢栄）も満州で戦病死し、残された老父母と妻と二人の子供はどんなにつらい年月であつたらうか……。

主人の弟（敞田一貫）も医師でした。妻と二人の小さい子供を残して出征してから二週間程の間に上海で戦傷者の手術をしていた所を支那の手留弾にやられ戦死しました。残された妻和子さんは、言いました。

「なぜうちの人ばかりが戦死したのか。帰還した兵士がよかつたよかつたと皆からさわがれて酒盛り宴会をしているのを隣の家聞いてみると腹が立って、腹が立って仕方がなかった。」と。

又、主人の家の妹（船塚なみ）も夫妻と六人の子供をつれて、身命からがらやつと引きあげて来ました。満州に大きな財産を残して……。

私達は、「欲しがりません 勝までは。」とスローガンの通り、歯をくいしばってがまんしました。

農家では、米、麦、大豆、小豆、じゃが芋、玉ねぎと供出させられ、くず米を食べて命をつないでおりました。魚は配給で、一週間に二回か一回ありましたが隣保班にくじ引きで分けてやつと五人に一匹の十五センチ位の魚を分けて食べました。砂糖もなく、塩も少ししかで配給がなく、煙草も酒も配給で今までの十分の一しか食べられなく、私達は、白い御飯なんかもつての外でよめな、せり、すいと、おおばこ等草もつんできておか

ゆに入れてすすりました。肉なんかもちろんありません。鶏など飼っている人は、つぶして食べる程度でした。

庭のすみや、空いている所は全部芋や野菜を作りました。婦人会も池や土手や笹原など開拓して、そばを作り二年目からは芋を作り、腹のふくれる事を覚えしました。

国民は、皆一億一心となり銃後を守りぬき、誰もががまんしました。あれ以上のがまんがない程心を棒にし、誰も不平や不満、不足を言いませんでした。

働く者が皆兵隊にいき、女子もどんどん仕事場がふえて、学校の先生も若い方は、出征されて、私共も（丁度小学校教員の免状をもらっていたので）教員に是非なつてくれと誘われ、洋裁を止めて在江の分校につとめました。滝尾へ行ったり、越路本校やら分校やら変わるつとめました。

昭和十五年十月主人が戦地より帰ると、おかゆを食べている私達を見て、子供が成長出来ないじゃないかと、はじめてヤミ米を買い白飯を腹いっぱい食べました。

当時まじめに配給だけ食べていた判事が法にそむく事が出来ないと餓死した人もありました。

戦争がようやく終わってから今度は、日本の財閥をこわして日本国が延びられないようにするため、占領政策のもと、農地開放が出来、財産の相続税がかかり（多量に）、贈与税がかかり、特に困った事は、田畑を所有している親作は、小作に開放させられた事です。私達は、小作から許可を得てかえしてもらった田を二年間も作ったのに地主立入禁止の立札を立て、植えてあ

る苗を引き起こして、取られた事は、残念でした。

★国防婦人会★

正式には「大日本国防婦人会」といいます。女の人が戦争にいつそう協力するようにするために作られた団体です。

昭和十七年には「愛国婦人会」といっしょになって「大日本婦人会」となり戦争に協力した。

口で言えないほどでした

曾我 源治

一 防空ごう掘り

おじいちゃんが舞鶴航空隊に兵隊としていた時、十人程で二百メートルほどの穴を掘り、二メートルかんかくに松の丸太をお宮さんの鳥居のようにかまして、上の天井に松の枝をのせます。そして、つるはしに岩をとおして、トロツコで外へはこぶのです。その時に、二人天井から岩が落ちけがをしたので、すぐに病院へ運びました。

このようにして横二十メートルのものを三本ほど掘りました。これが防空壕です。敵の飛行機がばくだんを落とすともよいのです。防空壕で指揮をとることもあります。一般の人も穴を掘り、その上に土をのせてかくれるのです。

二 勤労奉仕

おじいちゃんが青年団員の時に出征している家へ五人程度に分かれてお手伝いによく行きました。また、炭を石動山の高沢さんの家から二俵かついで組合の前へ来た時のことです。

武部の曾我さんの「家が火事だ」というので、炭をおろしてすぐ火事場へかけつけました。わたしは、ポンプにつながりましたが、家が全部やけてしまいました。

三 衣服

男の人は、国民服を着て、女の人は、かすりの着物ともんぺをはきました。今でも作業をする時には、女の人は、はいております。

四 交通

乗り合いバスは、木炭をたいて走っていました。汽車は、石炭をたき、ほとんどは馬車の車でした。

五 食べもの

農家の人は、勝つため米をむりをして供出しました。家では、豆めしを二食たべ、夜はおかゆでした。それにさつま芋、じゃが芋をよく食べました。じいちゃんが七尾の駅前に仕事をしている時に、お菓子なんか店に何もなく、さつま芋の油にあげたのを売っており買って来ました。今でもその時の味が忘れられません。

六 満蒙開拓

昭和十四、五年頃と思います。武部の木村さん一家が、満蒙開拓に行かれました。その先に木村さんだけが行かれ、一年た

つてから家族をつれてこられました。その時の感想を聞きました。今でも覚えています。

おじいちゃんが昭和十九年の九月から海軍に一年近く兵隊に
いっており、三重県の大湊へいく時一夜とまりました。その時
に名古屋が空襲で空がまっかにもえておりました。B二十九が
毎日のようにとんでいきました。

七 敗戦後の生活

どういっていいかわからないほどです。農家の人は、米を作
っているから少しいい方で、それでも米には、よもぎ、豆、さ
つま芋、じゃが芋を入れてのまぜごはんでした。夜は、さつま
芋、じゃが芋のおかゆでした

スメススメ ヘイタイ ススメ 戦争中の学校生活

戦争がはげしくなると、越路小学校（当時は越路尋常高等小学校）も大きな影響を受けました。

一年生の国語の教科書の一番はじめが、「スズメ ススメ ヘイタイ ススメ」とかわってきました。

そればかりではありません。「出征する兵隊さんの見送り」、逆に戦死された方をむかえる「悲しい出むかえ」、そして、強い兵隊になるためと、強い兵隊をうむための体づくりとして、男も女も上半身はだかになってやった「乾布まさつ」、戦争に勝つためにと汗を流した「勤労奉仕」、空襲にそなえての「防空・防毒・防火訓練」、満州やモンゴルの地に行く「満蒙開拓青少年義勇軍」の送り出しなど、次第に戦争のにおいが学校の生活にも重くのしかかってきました。

一九四一年（昭和十六）、太平洋戦争（大東亜戦争）が始まると、越路尋常高等小学校は「越路国民学校」と名前が変わりました。そして、天皇陛下のために命を捨てる国民を育てる「皇国民の錬成」を中心にすえた、戦争まっしぐらの教育が強くすすめられました。

学芸会も運動会も遠足も海水浴も、すべてが戦争に勝つための軍国調にあらためられました。

一九四二年（昭和十七）、それまで勝ち続けてきた日本軍も、この年の六月、ミッドウェー海戦で敗れると、あとは次々と敗退や全滅をくり返す悲惨な状況となってきました。

中国戦線でも中国の人たちの根強い抵抗によって、日本軍は泥沼のような戦いにおいこまれ、どうにもならなくなっていました。

アメリカ軍の空襲もひどくなり、学校はもう勉強どころではありません。

越路国民学校でも、出征した人のいる家へ農作業の手伝いに、食料不足のため運動場をほりおこしてサツマイモづくり、肥料にするための草刈り、軍馬のえさにする干草づくり等、毎日が大変な作業でした。

一九四五年（昭和二十）、授業はすべて中止となりました。

越路国民学校の上級生は、今のオリジナ越路で朝から飛行機の部品をつくる作業にでかけ、下級生も運動場のサツマイモ畑の手入れや、さまざまな作業で、学校は戦争のための作業所のようになっていました。

この章では、こうした戦争中の越路小学校のようすや体験をつづったものが「八編」よせられています。

そこには、戦争という嵐にまきこまれた当時の子どもの叫びが一語一語の中にあらわされています。

灰色の学校生活

藤井 良子（当時十二歳）

一 毎日が作業にあけられて

昭和十九年、私は六年生、この頃は戦も激しくなり、登校下校は集団でした。銃を持った高等科の男子生徒が立つ哨舎の前で、

「〇〇軍隊 以下十名。」
と、呼称し、敬礼して通り、教室に入りました。

物資不足、配給制度のはなはだしい状況下で、服装も高等科の男子は、ゲートルに地下足袋、女子はモンペにセーラー服、いつも防空ずきんを肩にかけていました。爆撃もしれつになつてからは、防空ずきんを頭からかぶつて学校の裏山へ避難しました。校舎を守るために窓ガラスは全部爆風よけの紙テープがはりつけてありました。食糧難で自給と供出のために、食糧増産活動が始まり、勉強は一、二時間程で、あとは作業ばかり。家から、鍬やこやし桶を持参で、畑をたがやしたり、便所からくみ取りして、二人でこやし桶をかついで運びました。今のプールや花だんの所は、全部さつまいも畑でした。防火用の池堀や夏休みを返上して堆肥作り、積込用草刈り、干草刈りドングリ採集で富山の氷見の山まで行きました。その時道に迷つて、日も暮れてうす暗くなり、雨がシトシト降っていて、みんな泣きながら、

「先生、先生。」

とはげまし合つて、やっと原山へたどり着き、ホツとした事がありました。この時のことは一生わすれません。

農繁期になると家が忙しくなるので、小さい子供を学校へ連れて来て、子守り半分、勉強半分の人が二人、三人いました。学校も午前中で終わり、午後は田んぼや子守りの手伝いでした。学校の行事でも落穂拾い、全校ハジの下へ行つてたくさんの落穂を拾つて学校へ持って行きました。また、イチゴ採集もあり、一升びんの中につめて、これも学校へ持って行きました。イナゴは粉にして、だしの素にすると聞きました。

冬の暖房用の炭を一人一俵の割り当てで、石動山からかついで、二宮まで持つて来ました。ともかく毎日が作業にあけられていました。

私達六年生女子は疎開者が多くて、あわせて六十八名いました。今の様に男女共学ではありませんでした。

昭和二十年、高等科一年生、この頃学校は鍛錬時間、鍛錬大会、すべての行動が軍隊式となりました。

二 学校行事として

・乾布摩擦

全生徒が上半身裸となり、タオルやタワシで体が赤くなるまでゴシゴシこすりました。

・運動会

ラッパを先頭にして、指揮台の上の校長先生に、

「頭、右。」

の号令で分列行進をしました。男子は城壁こし、馬事訓練、

女子はなぎなたをしました。

・学芸会

「戦地の兵隊さん」「神国日本」などすべて軍国調のものばかりでした。

・鍛錬時間

運動会でかけ足、二宮の大橋までかけ足。又、寒い冬にゆきの上を素足でのかけ足。足が痛くてこちこちになりました。

・学徒動員

二宮の湯瀬工場へ行きました。工場の食堂で一、二時間勉強してから飛行機の部品で「フーボ」というのをやりでこする仕事をしました。大人の人と一緒にだったので、楽しかったです。

時々学校へ帰って勉強したり、又、工場へ行ったりのくり返しでした。

昭和二十年八月十五日、終戦となり、勤労奉仕、訓練したのも停止となりました。

「ホシガリマセン 勝ツマデハ。」とたえしのんできた私達でした。

灰色の学校生活でした。

勉強もろくに出来ず・・・

八木 美枝子（当時十四歳）

昭和十二年四月、越路尋常高等小学校に入学し、その年の七月には支那事変、昭和十六年十二月には太平洋戦争勃発、校名も越路国民学校となり、私は初等科の五年生でした。

十二月八日の朝礼には校長先生から、

「日本は支那だけでなく、米国や英国とも戦いを始めました。みなさんもしっかり頑張ってください。」

というお話を聞き、何か身の引きしまるような思いでした。当時各家庭には、今の様にテレビはもちろんならラジオすらなく、新聞購読の家もわずかでした。それから、「興亜奉公」「身体鍛錬」の校訓の下に、勉強時間は少なく、鍛錬という時間があり、運動場や県道を雪の中でも跣で走りました。

越路小学校では運動場が第一、第二、第三とありましたが、次第に堀り耕されて、さつまいも、まわりには、ひまを植えました。ひまは飛行機の燃料ということでした。交通の量も今程激しくなかった道路の両脇には、大豆を植えました。肥料には草刈り作業で堆肥をつくりました。

秋の取り入れ時には、戦地で働いていらっしやる出征兵士の家に、土曜の午後や日曜日、少年団として、稲刈りや稲運びの手伝いに行きました。そんな時、配給でお菓子などもちろん何もなかったのです、さつまいものふかしたのをいただいたのがおいしくて、当時のおやつとしてうれしかったことを覚えていいます。

さつまいもはおやつとしてあまり食べられず、ごはんの中に入れた七分がゆのまぜごはんとして食べました。

昼食の時にはいつもお弁当の検査があり、

「白ごはんは、ぜいたくです。」

などと言われたりもしました。そんな時にも警戒警報や空襲警報のサイレンが鳴ると、裏山へ避難しました。

兵隊さん送りには、一、二年生は徳前の踊り場（古玉さんの家の前）まで、三、四年生は徳前のはずれまで、五年生以上は良川駅まで送りに行きました。遺骨迎えも同じでした。それも戦争が激しくなってくるとありませんでした。

高等科になってからは、学徒動員で、女の子達は、徳田駅前にある七尾航空会社へ行きました。朝は「若鷲の歌」を歌いながら守衛門を通り、仕事をしました。

しばらくしてから越路工場にかわり、朝一時間だけ寄宿舎での自習、それから大人の友達といっしょになって、飛行機のビヨウ打ちに、耳のつぶれる思いで働きました。

それでも木曜日だけは、登校日でした。団体登校で登り口に哨舎があり、上級生の男の人二人立っていて、少年団の分団ごと人員を報告して校舎に入りました。疎開者の人も増え、私達の学級は六十四人学級でした。

衣服も祖父母、父母の着物をこわして、良いところだけ取り、袖や身頃ろがちがっていたり、前と後ろがちがっていたりしたものも自分で仕立て直して着ました。毛糸のセーターなども小さいのを何枚かほどこき、いろいろな組み合わせで、一枚を編み直して着ました。

昭和二十年三月卒業の時は、みんなかすりのモンペ姿でした。

イナゴを食べて

鍛冶 武文（当時十三歳）

一 食物のこと

いなごを二、三日おいて、うんこを出し蒸して講堂にならべて、その後、粉にしておつゆの出しにしたり、つくだ煮にして食べた。

御飯は米がなく、菜っ葉、麦、いもなど具の方が多かった。中庭や運動場を耕して畑を作り、大豆を植えた。

二 学校のこと

防空頭巾を肩からかけて、風呂敷で持っていった。

ガラスにテールを貼る。（イギリスの国旗のように）

えんぴつで書いた上へ今度は、赤えんぴつで書いていった。字は細く書き、本などは、お古を使った。

封筒を裏返し、張り直して使った。

戦争に行つてなくなった人の家へ、掃除の手伝いに行った。

工場動員

山口 アサ子（当時十五歳）

戦時中の事は何を思い出しても、あの時代は、国全体がああいう風でしたから、こんなものだ、勝つまでは絶対に敵が上陸してもこの竹やりや木刀で、アメリカ兵をやっつけて・・・と、全部軍隊口調でいろいろ先生から教えられました事を、その通りに守って頑張っていたように思います。

女学校三年の時の二学期頃から、戦局が悪化したため、勉強をせずに徳田の軍需工場へ通いました。飛行機の部品等（愛知県半田の中島工場へ送る部品）の検査だったと思います。七尾から飛行機を組み立てて、ここから飛行機が飛ぶのだとも聞いたりしました。今から思えば、滑走路もないのに、デマみたいなことを信用して、一生けんめい作ったものでした。

ここら周辺の徳田織物・滝尾織布・越路織布などから出来る製品や部品の検査で、ドリルなどを持って現場へ出ている人からみれば、少しは楽だったように思います。

一般の工員の人達に二、三人ずつ配属されて、いろいろと叱られながら、冬は暖房がないものですから、椅子や古い机などをこわして暖をとり、昼食のときは、三階の屋上まで上がって同僚の人達とさつまいも等を食べるのが楽しみでした。もちろん、はきものはモンペに下駄、物資。食べ物がたりなくて、私達兄弟を育てた父母は、今日も明日も食べるのに大変だったろうと思います。

終戦は十六歳のときで、翌年の四月まで、少し勉強するのに学校へ通いました。

一番こわいと思ったのは、富山の空襲で、蚊帳の中に寝てい

るとき、ゴーゴーと音を立てて、B二十九の飛行機が、たくさん屋根の上を通って行き、今ここへ爆弾が落ちたら全部死んでしまうと思うと、こわくて眠られなかった事が、今でも浮かんできます。

田舎に育った私達は、特別にひもじい思いをせずに、又、都会の様に、疎開もせずに、当時を過ごすことが出来たのは、本当に幸いだったと思わずにはられません。

★軍需工場★

軍需工場とは、軍隊で使うものを作る工場であり、このあたりでは戦闘機の部品を作っていました。

徳田駅には、七尾航空会社、二宮には越路織布（現在のオリジナコシジ）でいろいろな部品を作り、愛知県の半田工場へ送りました。

徳田にあった建物が一部、相馬小学校の教室と体育館となつて残っていました。

すべてが軍隊式で

延命 みや子

昭和十四、五年頃は戦時下といっても、勝戦故、学校生活も規律正しく、一生けん命勉強にはげみました。運動会等も軍隊式であったように思います。高等科の女子生徒は、運動会にナギナタを持つてとても勇ましいものでした、又、勤労奉仕にも行きました。

これは日支事変の頃でした。出征兵士の家に行つて秋の取り入れの手伝い等をしました。その拾った穂を学校の運動場に干したものでした。一粒のお米も大切にしました。

荒地の開こんも少しでも、食糧増産に協力したものです。お米はもちろんのこと、さつまいもの供出もありました。戦争の悪化と共に食糧難となり大変でした。それから、戦時中は、材木の供出があり、たくさんの方材木を切り出しました。船を作るためだったそうです。家にもくるみの木があり、鉄ぼうを作るために供出してくれといわれ、供出しました。

その頃、松根掘りをして、油を作る工場へ供出したものです。さて、衣服等も配給制で、それはそれは大変でした。日常の和服や洋服等も、お母さんの着物をくずして洋服にしたりモンペにしたり、とても今考えると本当に物を大切にしたこと、又、工夫してどんなに小さな布小切れでも利用したことが、とても楽しかったように思います。

をはじめ、材木、米やいもなどの食料品、松の根も油にするために供出しました。貴金属なども供出したそうです。

★供出★

国民は「お国のために」と鉄製品（お寺の鐘や仏具までも）

今は幻の様に思えて

橋本 かず子（当時十一〜十五歳）

今から思い出せば全く幻の様に思われるのですが、戦争中に入学し、小学校五年生の頃でしたか、授業時間には大きな世界地図を教室の正面横に必ずつるして、戦況の様子を聞き、又、体操の時間には木刀とかなぎなたをよくやりました。

支那事変から大東亜戦争と変わっていき、新聞やラジオは貴重なもので、教科書より大事に見聞きしたものでした。夏休みには、毎年毎年干草を作り、各自大きな一束を背負って登校したものでした。これは軍馬の餌に戦地へ送るとかで、みな真剣にしました。又、農業の時間があり、学校の畑でさつまいもや馬鈴薯を作り、食糧増産に協力したものでした。

その当時は、勤労奉仕もたびたびあり、小学校の子供といえどもよく働いたものでした。学年も高学年になると、戦争もますます激しくなり、勉強も机にすわる時間がだんだんなくなり、学徒動員で軍需工場へ働きに行く様になり、大人の人達とまじって飛行機増産に“エイヤー”や“ハンマー”を持ち、頑張った事でした。

その間にも防空演習があったり、避難訓練があったりして、防空頭巾とモンペ姿は当時の制服の様なものでした。みんな真剣で先生の指導の下で、頑張ってたと思います。

警戒警報と爆音におびえて

宮下 喜代子（当時十歳）

昭和十六年に第二次世界大戦が始まり、翌年十七年に越路国民学校に入学、終戦二十年八月は四年生でした。その間、戦争はだんだん激しくなっていくとは聞いても、農村地帯でしかも子供だったので、何がどのように大変なのかよくわからないうちに、終戦を迎えたようです。今は亡き両親、又、少しの年の違い故に兄や姉達は、苦勞と体験も数多くしていると思います。そんな中で、心に残っているものを拾ってみました。

金物の供出とかで、仏具や鉄びん等を部落の班長さんが集めにこられたとき、親達のさみしい顔を柱のかげで黙って見ていました。大事そうなものは、みな取られたという感じで、家族中しんみりしたのを覚えています。

食べ物は朝、昼は麦・芋・豆等の御飯で梅干し・漬物・干魚等です。又、米の粉で作っただんごやすいとん、かきもち、あられ等いいおやつでした。夜はほとんど野菜入りおかゆでした。夜は光を外へださないように、電燈に黒い布をかぶせて長くたらし、電燈の下だけ明るくして勉強しました。

夏休みには、干草の割り当てがあつて、道端や土手の草を刈り、道路の片側に干し、乾燥したら形よくしぼるのですが、たくさん刈ったと思っても計ってみると足りなくて、又、刈らねばならず、親にも刈ってもらってやっと学年に合った重さにして持って行きました。

学校内ではいつ頃からか軍隊式の呼び方になり、学年やクラス毎に大中小隊に分け、職員室へ出入りする際には、

「第〇大隊、第〇中隊、第〇小隊の〇〇が、〇〇先生に用事が

あつてまいりました。」

と言わなければならぬので、とてもいやなことでした。

四年生の六、七月ころだったかと思いますが、とてもよい天気の日でした。昼食の時間になり、弁当をひろげたその時、警戒警報のサイレンが鳴り渡り、弁当をそのままにして、椅子にかけてある防空ずきんをかぶり、廊下を二列にならんでかけ足上の運動場を通って裏山へ逃げました。

「地面に伏せろ！」

と先生の声、みんな一斉に木の枝の茂った下に伏せ、草にしがみつきました。ゴーゴーと飛行機の音、今にも爆弾が落ちるのではないかと、この時ばかりは非常におそろしかったのです。

しばらくして静かになり、そっと顔を上げると、木々の間から太陽の光が線状にふりそそぎ、とてもきれいだったこと、草の緑がとても濃くてきれいだったこと、その草がみんなが伏せたために、いたんだようになっていたことを覚えています。

日頃、避難訓練をしてもおそろしいという実感があまりなかったように思いますが、この日ばかりは身にしみて感じました。実際に空襲をうけなくて、ほんとうによかったと思います。

英語も廃止になり

山本 登志

私は大阪に住んでいました。秋には、大阪府の出征兵士の家の稲刈りに毎年、勤労奉仕に“学徒勤労奉仕隊”と書いた旗を立てていき、一生けん命に奉仕したものでした。学徒動員は衣服工場へ電車に乗って行きました。うさぎの皮を切る仕事で、防寒服の裏になるとのこと、切れるナイフでスーツと切ったのを覚えています。又、袴下も縫いました。

私が女学校に入学した時は、英語が廃止になり、アルファベットしか知りません。洋裁も裁縫も習うのは大変で、裁縫では、着物をほどこき、洗い張りをし、教材にして、母の手をわずらわしました。体操の時間はなぎなたで、その時だけスカートをはいて

「エイヤー。」
とかけ声をかけて、汗をながしました。先生はとても厳しかったです。

空襲大敵と防空訓練も真剣にやったのが目の前に浮かんできます。空襲が激しくなりました。空襲警報で寝ているのを飛び起き、手に学校のカバンを、肩に避難袋をかついで、防空ごうに走って入り、解除になるのを暗い中で待ちました。たまには、空襲警報のサイレンが鳴っても防空ごうに行かないで、窓から飛行機を見ていたこともありました。飛行機はB二十九でした。食べ物が配給になると、朝早くから列をつくって買い求めました。

衣服は衣料切符、点数で買ったものでした。私も百貨店で着物を点数で買ってもらったのを覚えています。

★英語廃止★

英語は、敵国のことばなので、すべて使つてはいけないうことになりました。

たとえば、野球ではストライクが「よし」ボールが「だめ」となり、スポーツのよび名では、バスケットボールが「籠球」に、バレーボールが「排球」に、テニスが「庭球」とかわりました。

★衣料切符★

衣料切符とは、一人が一年に百点の切符を与えられ、その点数内で、衣料品の買い物ができるという制度でした。

たとえば、学生服が十七点、女兒スカートが五点、パンツが四点などで、着物は点数が高くて、なかなか買うことができませんでした。

“勝つてくるぞ”と勇ましく
出征と戦場

どんなに仕事がいそがしくても、どんなに子どもがかわいくても、「赤紙」が一枚くると、理由がどうあろうと、必ず兵隊にいかなくてはなりませんでした。

そして、やがて戦場へ……。

戦場は、いうまでもなく殺しあう場です。いつ、どこで傷つき、倒れるかわかりません。

あとに残された家族は大変でした。おさない子どもや年老いた父母をかかえ、女手ひとつで日の出から日のくれるまで、夫の分まで働かなければなりません。

結婚してすぐに夫が兵隊にとられた場合だと、出征後に子どもが生まれることもあります。父親の顔を一度も見たことのない子どもも少なくありませんでした。

- 一九三一年（昭和六） 満州事変
- 一九三二年（昭和七） 上海事変
- 一九三七年（昭和十二） 日中戦争（支那事変）
- 一九三九年（昭和十四） ノモンハン事件
- 一九四〇年（昭和十五） 仏領インドシナの侵入
- 一九四一年（昭和十六） 太平洋戦争に突入
- 一九四二年・六月 ミッドウェー海戦で敗れる
- 一九四三年・五月 アッツ島の日本軍全滅
- 一九四三年・十一月 マキン島、タラワ島の日本軍全滅
- 一九四四年・七月 サイパン島の日本軍全滅
- 一九四四年・十月 神風特攻隊

一九四四年・十一月 日本本土の空襲はじまる

一九四五年・三月 硫黄島日本軍全滅

一九四五年・六月 沖縄の日本軍ほとんど全滅

一九四五年・八月 広島・長崎に原爆

一九四五年・八月十五日 日本無条件降伏（敗戦）

一九三二年（昭和十二）、日中戦争から敗戦までの日本軍の戦病死者数、約二百三十三万人、行方不明約六万三千人です。

越路だけで調べてみると、同じ期間の戦病死者は約百二十人をこえると考えられます。

この章では、「十編」の体験がよせられていますが、出征した人はもちろん、家族をもまきこむ戦争の非人間的な冷たさと平和の尊さが強くうったえられています。

召集、満州、捕虜

町口 外男

一 支那事変

如何なる理由があろうと、戦争は起こしてはいけない。同じ地球上に住む人間同士の殺し合いであるから。

昭和十二年七月七日、満州国と支那との国境を警備する日本軍と支那軍とのいたずらな発砲事件が発端となり、支那事変という大戦争がぼつ発してしまった。

私は十二歳、小学校五年生であったが今でも覚えている。新聞号外やラジオで日本と支那との開戦が報じられると町中の人々は、「またいくさか。」と、ため息と不安がかくせなかった。

それは、日本は過去幾度かと戦争を経験しており、その度自身内や友人の人達を戦死させていたからです。

二 召集令状

数日後には、日本軍の兵役の義務のある若い男子に召集令状が伝達されて来た。向いの父ちゃんに隣のあんちゃんに、裏のおっちゃんといったふうに連日のように召集令状が届けられるようになった。

令状を受けた人はどんな身分の人であろうとも、どこに行つて働いている者であろうとも指定された日時に連隊に出頭せねばならなかった。召集令状を受けて行く人を出征兵士と呼んだ。

三 出征兵士

出征兵士の出発の時は町中挙げて見送った。老いも若きも男も女も小学生も勉強を休んで日の丸の旗を振って、良川駅と徳田駅へ見送りに行ったものだ。

『天にかわりて不義を討つ、忠勇無双の我兵は歓呼の声に送られて、今ぞ出で立つ父母の国』と、軍歌と万歳の声に出兵兵士は皆異口同音に、

「御国のために戦いに行きます。」
と言った。

「行って来ます。」
と、いう者は一人もいなかった。

それは、死ぬを覚悟していたことを意味していたのでありません。

出征兵士の家の前には親せきの人や近所から贈られた大旗小旗が幾十幾百本も並べられた。その旗には、

『祝 出征 山田太郎君』
と、いうように書かれてあった。

又、出征兵士の家の庭にある一番高い木の上には、日の丸の旗が掲げられていた。遠くからでも出征兵士の家が分かったものだった。

そして、月日も立つにつれて戦争は激化して行き、それに伴って出征兵士も増えて行った。

やがては元気で出征して行った兵士達は、次々と戦死。白木

の箱に納まって無言の帰還となり、バンザイの声で出征してゆく兵士と遺骨となって帰って来られる英霊との送りと迎えの交互のようになってきたのであります。

戦地では、我日本軍は支那の各地で勝利をおさめ、主要地には日の丸の旗を掲げては占領地を広めていったのであります。

四 満州へ

私は昭和十五年高等小学校を卒業し、明年の十六年四月、満州鉄道へ入社したのであります。

当時、私は十六歳、まだ少年であった。私は父母兄弟に別れを告げ、単身神戸港より満州国大連に上陸し、満鉄本社で日本本土から集まって来た少年三百名程と共に入社式に出た。そして、満州全土に分れて、職場に就いたのであった。

私は新京、今の中国東北部長春に配置された。初めて来た他国で、言葉のわからない他国人と同職場での勤務が始まったのであった。

いろいろ苦勞の中、昭和二十年四月、私は徴兵検査を受け、甲種合格となり、現地新京部隊に入隊した。

五 入隊

戦争は支那事変から、日米戦争へと発展し、長い戦争のため内地も満州も食糧不足、生活物資不足になって来た。

若い男はほとんど兵隊に出征し、老人と婦人子供の銃後の守りになって来たのであった。

そうした時期に入隊した私達はびっくりした。部隊には、全兵士に与えられるだけの武器がないのであります。二人に一丁の小銃と一人に数個の手投弾しかない状態であります。飛べる飛行機は一機もなく、大砲があっても弾がない。戦車があっても燃料がない有様。

これでは大国アメリカに勝てるはずがない。そんな弱り切った二十年七月、ソ連の宣戦布告があり、戦闘が開始されたのであります。

六 ソ連の宣戦布告

我々の部隊もすこしは抵抗してみましたが、ソ連にしてみれば赤子の首をひねるようなもの。

日本軍は犠牲者の出るばかり、多くの戦友を目のあたりに亡くしたことは思い出しても目頭があつくなる。

やがて、内地では米軍のB二十九爆撃機による空襲。東京も火の海と化し、長崎、広島へ原爆の投下。

ついに日本は、降伏のやむなきに至ったのであった。

七 捕虜

私達はソ連の捕虜となり、シベリアへ連れて行かれ、昭和二

十四年十二月までの四箇年間、抑留生活を送ったのであります。

★満州国★

一九三一年（昭和六）満州事変を起こした日本は、満州全土（今の中国東北地方）を占領すると、翌一九三二年満州を中国から切りはなして独立させました。これが「満州国」（満州帝国）です。しかし、実際は中国東北地方を日本が支配するために作った国であったため、世界の国々は満州国を独立国とは認めませんでした。

★徴兵検査

明治以来、男子には兵隊に行く義務がありました。「兵役法」とう法律によって、二十歳になると兵役になるための検査をうけました。身長は百五十センチメートル以上の健康な者は、甲種か乙種の合格となり、あとは赤紙とよばれる召集令状を待つばかり。

赤紙がくると、どんな理由があろうと兵隊としてつとめに行かなくてはなりませんでした。

一通の手紙

川畑 きぬ子

昭和二十九年生まれの私は、幸いな事に戦争というものを体験せず、また、経済大国ニッポンへ成長しつつある時期に育ちました。

従つて、戦争とは悲惨なものという観念はありますが、実際には全く知らないわけです。本当の苦しさ、辛さ、恐ろしさは知りませんし、知ることにならなければ良いと思つています。

でも、私は二、三年前に仏壇の引き出しの中からある一通の手紙を見つけた時、胸がしめつけられる様な思いがしました。

それは、祖母へあてた故おじさんの最後の手紙だったのです。遺書となるべき覚悟で綴られたものだったのです。

『拝啓、其の後永らく御無音に打ち過ぎ、失礼の段、平に御許し下さい。又、先般は父上と共に遠路のところを面会にきて下され誠に有難う御座いました。』

皆々様には御変わりもなく職務に励んで居られる事と想います。助一も相変わらず元気です。学校の方も先般無事卒業致し、今や遅しと艦船の入港するのを待つて居ります。今は横須賀海兵団にて、其の日の来る日を待つて居りますが、今度の出陣こそは自分にとっては、又、男子の本懐として悦んで出陣し、身に受けし大任を全うし悦んで死所に就きます。

学校へは数多き志願者中依り選抜されて入校し、今は大任を以つて重責に趣いては家名の誉れと御悦び下さい。

遺言など今更なし。私の今日あるまでの御養育を今に於いて厚くお礼申し上げます。

愈々前線に出れば手紙など出せないと思ひます。此れが最後の便りとなる事も決して女々しい振る舞いなどなき様お願い致します。父上様にも宣敷。親類の皆様にもなんの便りも出さなかつた事をくれぐれも宣敷。

泉さんを始め従業員一同の方々にも宣敷。

先ずは此れにてペンを止めます。何分御身御自愛なされ御暮し下さい。

君の為、何か惜しまん若桜

散つて甲斐ある命なりせば

一月二十八日

助一

母上様

(追伸 みや子や光男にも宣敷)

昭和十九年七月十五日、助一戦死の公報が入ったそうです。

でも祖母の夢枕に立たれたのは七月八日だったそうで、今だに我家では八日が亡くなられた日、十五日が公報が入った日と、二日助一さんのためにお参りしています。

おりしも夢枕に立たれた七月八日、この日私の父が海軍飛行予科練習生として、土浦海軍航空隊へ入隊する日だったそうです。

祖母はこの一通の手紙を目にする度、つい昨日の事の様
に思い出され、目頭を押さえて念仏をとなえています。

今、親となった私には、祖母の心の痛みがよくわかります。

今だに世界のどこかで戦争が起こっています。

世界平和は、あり得ないのでしょいか。

★予科練★

海軍飛行予科練習生のことをいいます。戦争が激しくなり、
空戦が重視されてくるにつれて、パイロットが不足していきま
した。それを補うためまだ幼い、十四から十五歳の少年に約三
カ月間基礎教育をおこない、三年後、戦場へと送りました。

当時、十七から十八歳の若い命が上空にたくさん散っていき
ました。

ミレー島上陸

松本 幸二

召集令状が来たのは、昭和十八年の九月頃でした。私は二十四歳。

大阪で洋服の仕立てをしていて呼び戻され、家に戻る間もなく金沢で親と対面して、金沢の七連隊へ入隊しました。

約一カ月間でしたが、訓練は以前に教育召集でしていたので、集団生活というかんじでした。

十月の末、肌寒くなった頃、行き先も告げられないまま汽車で広島へ。連隊は小隊、中隊、大隊と分けられ、総勢十人以上。

広島港から巡洋艦竜田に乗せられ、台湾近くで暴風圏に入り、船に慣れない者ばかりで全員酔ってしまい、吐くなど大変でした。

トラック島で停泊。そこには戦争はなく、海軍司令官の指示を受けた様でした。

次はポナペ島。ヤシの木、パンの木が繁り、黒人が静かに住んでいる島でした。そこで一カ月間暮らしました。

出発は私が所属する第三隊だけで、竜田に乗り込み、戦闘中のある島へ、敵前上陸と聞かされました。

上陸する前に日本が玉砕されたとの知らせが入りました。それまでは勝つと思っていた皆の心はもう負けだという確信にかわりました。

頭上には米国のB二十九や、グラマン戦闘機が飛びかいます。空襲警報が鳴ると、船の底に皆入って待ちます。

ミレー島上陸に変更。ミレー島は山がなく平坦地。ミレー環礁と言って、干潮時には歩いて四十余りの島を渡れるのです。

食べ物には白米のごはん。野菜は内地から乾燥した物を送って来ました。

防空壕作りで、のこぎりで切った木を運んだりしました。暑いけど、病気で死ぬような人はいませんでした。

約一年、平穩に駐屯していたのですが、段々船が入って来なくなり、食糧難になって行きました。

夜、潜水艦が食糧を運んで来ました。それもつかの間、玄米ごはんになり、粥になり、唯一の楽しみのお飯が淋しくなってきました。

爆撃、艦砲爆撃が激しくなり、敵の船が陸地から見えるのです。ミレー島の飛行場が的。こちらにも島の要所要所に大砲がすえてあるのですが、明治時代の物なので、打てども打てども当たりません。そのうちの海軍の新式の二台はうまく操作することができないのです。

グラマン戦闘機が低飛行して来ます。それを機関銃で打てども相手はビクともしません。

粥も当たらず、草の葉等煮て食べるようになりました。

月夜の干潮時に月見貝を拾いに出、それを食べたのがおいしかった。

ヤシガニをゆでて食べたり、ネズミをつかんで食べたり、とにかく食べないとどうにもなりませんでした。

食糧を集めるのが仕事でした。ヤシの木をたいまつにして、ウミヘビ、タコつかみもしました。これらのものが皆主食になります。

米船がこちらに食糧があるから降参するよう誘いかけてきます。

ある二人が日本語の呼びかけで、投降しました。衣服もボロボロ。生きてるのが精一杯でした。

四十ぐらいの島に分散して、もう軍隊とは言えないくらいでした。

アメーバー赤痢が流行しだし、毎朝一人二人と死んでいきました。骨と皮だけで横たわっているのを見ても悲しいという感情はもう湧かないくらいでした。それでも敵は飛来して打ってきます。

終戦は、十月に敵の飛行機がまいたビラを見て、初めて知ったのでした。

これで終わった！三分の一くらいに残った人は、皆、元気なし。配給で、生まれて初めて食べたハムの味は忘れられません。

氷川丸が迎えに来てくれ、横須賀港へ。そこから各々汽車で郷里へ。

★ミレー島★

南太平洋マーシャル群島の中の小さな島で、常夏の島。パンの実の木とかやしの実のなる木がたくさん茂っていて、その実を食べて暮らしていました。

第一次世界大戦は日本が支配していましたが、今は米国の支配下にあります。

親から聞いた話

橋本 静子

第二次世界大戦の経験のある父を持つ。

戦後二十二年生まれの私達は今ののようにテレビ、その他の娯楽のない小学生の頃、秋の夜長や、冬、いろいろの回りによく聞かされたものです。

昭和十八年九月にアメリカ本土を攻略する作戦で司令部をトラック島におき、ポナペ島へ渡った。

クサイ島、ミレー島などの仲間が分散して防備についた。その後、毎日アメリカ軍の爆発をうけていた。

戦友数名は、いよいよいさぎよく戦死することを決心して、敵の上陸を今日か明日かと待った。

その日が来たかのようにポナペ島のまわりにアメリカの軍艦数十隻、空から爆撃銃射に囲まれた。我日本軍はひっそりと少しも交戦しなかった。アメリカ軍はいつともなしにいなかった。

数日後、サイパンが玉砕した。二、三日おきに激しい機銃照射の玉を見ながら、陣地をつくったり、食糧とするさつまいもをつくったりした。又、南方特有の果実などを採した。

それでも栄養失調で死んでいく友もいた。幸いに生きて帰れただけでも感謝しています。

生き残った戦友同志で、五、六年前慰霊団を作り、現地ポナペ島へ墓参りに行って来た。当時を忍び、皆涙ながらに帰国したそうです。

戦地で戦った人々の苦労はいうまでもなく、二十四、五歳で戦争で一人息子を取られた母親の気持ちは察することは出来ま

せん。

召集を受けて、金沢の七連隊にいる父へ面会の許しの出たある祖母は父に「かいもちを食べさせてやりたくて、着物のたもとや帯の下につぶれないように、そして見つからないように、息子に会いに行った。」と、当時を思い、流れる涙をふこうともせずに語ったこともありました。

昭和十九年に長女が生まれたと戦地で便りを受け、太平洋の洋の子を取り、『洋子』と名付けたそうです。

★玉砕★

戦争で全滅することを「玉砕」と言いました。日本軍はガダルカナル島で負けたあと、アッツ島、マーシャル群島のクエゼリン島、ルオット島、ブラウン島などで全滅し、つづいてサイパン島、グアム島、テニアン島、硫黄島、沖縄と次々と全滅と敗退をくり返していきました。

★ポナペ島★

太平洋のカロリン諸島の中にある島。以前はドイツ領であったが、第一次世界大戦後は日本が支配するようになる。太平洋戦争では、越路からもこの島へ行ってアメリカ軍と戦った人がいます。今は、アメリカの支配をうけています。

出征の日

寺西 久一（当時三十一歳）

昭和十七年七月二十八日、待ちに待った召集令状が来ました。これで私もお国のために働く時が来たと思おうと、本当にうれしかった。

いよいよ出発の日が来ました。

長い年月ながめた向かいの山、家、向かいに見える学校、六年の間のいろいろの思い出、学校の先生方。思いは尽きない生まれ故郷……。

となり近所の人々や家の人達にも今まで育ててもらったお礼を言つて、皆の人達に送られて家を一人で出発。

良川駅より汽車に乗り、汽車の窓から懐かしい石動山や舛形山が見えなくなり、始めて涙が出て、「ああ、これである山や在所の人達ともおわかれだな。」と思うと、まったくやりきれない淋しい思いをしました。

金沢七連隊へ入隊いたし、四日間ほどは田舎の事を思いました。五日目、連隊の「死んで国の柱となり、靖国神社に行け。」を別れの言葉として、すぐ国を後に戦地へむかいました。

今思えば良く生きてこられたなあと思ひ、神や仏、皆様のおかげさまと時々思い、感謝の日を送っています。

★靖国神社★

一八六九年（明治二）明治天皇の命令で東京につくられた神社。ここには明治前後から第二次世界大戦までの戦死した人約二百五十万人の霊がまつられています。同じような神社で、各

県に護国神社（旧招魂社）があります。これらの神社は、過去に戦争をするために利用された事がありました。

スマトラ・パレンバン市にて

寺西 久一（当時三十歳）

スマトラ・パレンバン市に駐屯し、警備宣撫した様子

私は、昭和十七年七月二十八日午後十一時頃、令状を受け取り七月三十日入隊。丸五年二ヶ月満州を始め、南方マレー作戦にて東海岸をばく進。大ピン戦ジホルバル、シンガポール戦を終えてシンガポール飛行場に集結。ビルマに行く事になっておりました。出発前夜作戦変更、広島部隊と変りスマトラ作戦に加わり、またアジア上陸。スマトラの端からオランダ軍を追い詰め、ラハト市内に入り、後続部隊にラハトを渡し、又進撃。スマトラの西端迄占領致し、留守隊に渡し、スマトラの中間パレンバン市に駐屯。スマトラ警備に付いて丸五カ年警備に。東西南北いたる処を警備宣撫。スマトラの人達や子供達によるこぼれました。中でも、心に残るのは現地の子供達に日本の話をし、又、アイウエオやイロハニの字を少しずつ学校のできる迄教えてやると、毎日朝から子供達がえんぴつと紙を持って私達の所へくるので、うるさいやらかわいいやら複雑な気持ち。皆兵隊はそれでも宣撫の一つ、ひまができれば相手になつて教えたり、又現地のことばを習ったりした。日本の子供達の話をする時、日本の子供をうらやましがったり、又、日本の暮らしたなどを話すと日本へ帰る時つれていってくれとせがまれました。まだまだいろいろの事がたくさんありますが、書きつくせません。又、暑い所で私達のいた所は赤道直下で一番あつい所で、あせが流れっぱなしでふいてもふいても体からわき出るのです。手紙を家へ出しても、家につかず、五年間で七通程しか書いていませんでした。私の中隊で鹿島郡で六人いたのですが、私一

人になりました。久江に二人、酒井に一人、三室に一人、鳥屋の春木に一人、私と六人です。私達の中隊生存者七人年に一度お盆に集り、死者の御経を上げて供養しています。今年は五人になりました。一年に一人一人欠けていきます。淋しい事です。

★宣撫★

政府の方針や目的を説いて、占領地などの人民を安心させ、親しませるようにした。スマトラの人達や子供達に日本の話をしたり、字を教えたりして親しんだ。

我が青年期の体験

橋本 進作（当時二十一歳）

一 現役兵上等兵として

昭和十四年一月十日現役兵として、歩兵第七連隊第九中隊へ入営。当時は現在の様な生活状況ではなく、教育についても今とは全く異なる軍人として、兵営の生活は又格別な苦勞でした。主食も副食物程度のめった汁及び漬物で訓練の厳しさのため空腹おびただしい。

四月北支へ派遣になり、討伐任務の守備についたが内地程の食生活でもなかった。四十数年前のことだからはつきりと書き表わせない。同九年討伐中に負傷し野戦病院へ護送され、二ヶ月後に、大きな大作戦があり無理矢理退院させてもらい、原隊へ復帰しました。

当初は弾丸のこわさもあつたが掃討作戦も終り、鉄道守備の任に着いたある晩のこと橋本上等兵は部下四名と軍用犬と共に保定駅までの鉄道巡察途中。

敵の八路軍と遭遇し真暗い事として相手方人数不明のまま、機関銃等に射撃を命ずると手流弾戦となり、軍犬負傷するやそのまま本部までの道のり約六キロを駆走銃撃音に本隊すぐ装甲列車で後援命拾いをした事、軍犬の連絡にただ可愛さ一ぱい。その外守備中に敵襲に見舞われる等いずれも暗闇ばかりで、作戦上の要務とはいえども今だからわかつたのであるが、大東亜戦争のため南方へ進出するため北支においての最後の掃討戦が行なわれた。黄河の渡河戦又は突撃の敢行。今思うに良く戦つ

て来たものと我ながら痛感する。

十二月八日、大東亜戦争始まるや青島に集結。元旦を盛大にすまし、以前の仏領印度へ平和進駐し守備の任に着いて約七ヵ月後の昭和十七年八月現役満期の命令が下り、太平洋の戦況が悪化しているその洋上を航行十一間もかかり、やっとの事で浦賀港へ到着しかろうじて祖国の土をふむ喜びただただ皇居に向かつて捧げ銃。

郷土へ帰って物資の不足いよいよ勝たんがための国民総動員。学校では、勉強のかたわら勤勞奉仕。軍人の出征についての良川駅までの見送り。婦人会にあって国防婦人会とか愛国婦人会との名称で落ち着くひまもない位青年学校の指導員、在郷軍人教育もあわせて専念。教育の不足する人は一週間歩兵七連隊へ入営させられ特訓といったきびしさであつた。

二 応召令状が下る

そうして一年は過ぎ再び十八年九月農繁期を目前にして、召集令状が下り、年寄つた両親と別れはいささかつらかつたわけだが、勇をこぶして応召する。（当時二十六歳）

先にも書いたように太平洋増々戦況悪化の中を山城戦艦を旗艦とした空母二、巡洋艦四、潜水艦二等で南方機動部隊で進出状況の悪化によってトラック島に司令部を置き、我が連隊はポナペ島、クサイ島、ミレー島と一個隊ずつ配置され守備と陣地構築作業まで毎日を過ごしたわけだが、半年一カ年と過ぎるや

爆撃ははげしさを増し、サイパン玉砕数日前、島を敵戦艦数十隻による艦砲射撃と空より爆撃機による爆撃又戦闘機より機銃掃射され、いよいよこれが最後かと思つたが守備兵隊の命により沈黙を守れとの達しにより、敵も我が軍の勢力の判断に苦しんだが、後にサイパン島の玉砕になつたわけ。六年間に墓参団に参加致し、島めぐりをしましたが、全く悲壮さを物語つていたかの様であつた。

以上長くなるので終わります。

★野戦病院★

戦場で負傷したり、ひん死の状態の兵隊を手当てする病院です。

鹿島町のお医者さんも戦地へ応召されて、そこで働いた人も何人かいらつしやいます。

★八路軍★

八路軍というのは、中国共産党の軍隊のことです。日本軍と戦いながら中国の開放をめざす八路軍は民衆をたいそう大切にあつかい、農民の手伝や指導などもした。

慰問袋と認識票

今井 良江（当時二十七歳）

一 当時の自分

私の当時の思い出の一端を述べて見ます。

昭和十二年七月七日日本と中国が戦争となりました。原因、理由、目的はここには申しません。

日本は国をあげて中国との長い闘いとなり、ついに世界第二次大戦となつて、昭和二十年八月十五日の敗戦まで苦しい生活が続きました。私も昭和十四年一月十日金沢の歩兵第七連隊に入隊した。国民の三大義の一つ兵役に義務で二十歳に達したので、現役兵として徴兵入隊した次第です。

以後軍人として昭和二十二年十月帰国する迄約十年を異国の土地にてすごしました。当時日本国（内地、朝鮮、台湾、カラフト）以外を外地又は戦地と呼び国内のことを内地又は銃後と呼びました。

二 慰問袋について

慰問袋とは銃後の人達が真心こめて袋の中に老若男女をとわず珍らしい物、お菓子類、手づくりの体に着ける物、お守り、慰問の手紙を入れて戦地に働いている兵隊にお送りしたんです。

私もこの慰問袋を数多く内地の皆々様からいただきました。郷土の香りがして銃後の人達の苦しい生活の中からおくり物はうれしい限りでした。これも終戦まで続き戦地と銃後を結ぶ心のつながりでした。慰問袋の縁で種々のロマンスも数多く見

受けられました。

三 認識票について

認識票は内地部隊より外地（戦地）に出発する兵隊全員に配布されて、これを体につけて片時も放す事も無く肩から吊るして持って居た物です。兵種階級をとわず所持しておりました。戦地で戦死戦病等の折りは遺留品の上に置けば住所氏名がわかります。私も最初外地出征。

昭和十四年四月二十五日金沢出発の時いただいた物です。これは中国支那方面に出征中の郷土部隊歩兵第七連隊へ補充要員として出発したものです。

認識票も部隊が変われば新しい物が配給になります。故に、私も復員迄に何枚か戴いております。持ち帰れたのも不思議な縁です。昭和十五年七月北支那の部隊より内地東京の陸軍工科大学（特待兵）へ入校を命ぜられて、学校訓練を終えて、休暇を戴き家に立ち寄った際、既に新しい部隊の認識票を所持していったので、最初のもの不要のため記念と思い家に置いて、再度外地へ向かいました。久し降りて内地の郷土の土を踏み感無量でした。

工科学校を終つて、中国の元の部隊に帰り、長い軍隊生活が続きました。兵隊さんのよく歌った軍歌の一節です。

一 お国のためとは言いながら

人のいやがる軍隊に

召されて行く身のあわれさよ

可愛いスーチャンと泣き別れ

二 朝は早から起こされてぞうきん掛けやし

はきそうじ いやな上等兵にやいじめられ

泣き泣き送る日の長さ

終戦は、朝鮮平壤市の部隊で二十七歳でした。

沖繩対空戦争の一日

山敷 正雄（当時二十三歳）

想い出せばあれから四十年・・・昭和十九年七月十二日、私達の部隊を乗せた輸送船は沖繩に上陸した。休む間もなく、一路目的地へと進んだ。途中轟音と共に敵機B二十九の編隊が空を真黒にして私達の部隊を目掛けて爆弾を投下した。炸裂する轟音と共に一瞬にして我が戦友や兵器は空高く飛び散った。既に逸早く我が日本軍から猛烈な発砲と共に対空戦争の火蓋が切られた。

空も地も火の海と化した。住民の方達はけんめいに防空ごうへと逃れた。それは口号とした生き地獄であった。正に「皇国の興廢は此の一戦にあり。」日本軍の発射した弾丸は見事に次から次へと敵米飛行機へ命中した。

誰叫ぶともなく、「ヤッター！」「万歳」・・・の聲がした。敵機の飛行機は墜落又は燃えながらも一機一機といづこへとなく姿を消した。長い長い戦いの日でした。立派な日本軍の輝かしい勝利でした。今度はいつか復讐に来るだろう。私達の部隊は万全の態勢で沖繩の整備に当った。

日本軍の勝利のために

人間の尊い生命を守る為に

子供達の将来のしあわせの為に

そしてこの歌を兵隊さん達は口ずさんだ。

一 嗚呼南海の一角に

星章燃ゆる 眉あげて

練磨の腕に 剣を執り

敵撃滅に ひた進む

命榮ある 我が戦友よ
今 尽忠の 秋来る

二 嗚呼其人の 神風に

散りて甲斐ある 桜花

草むす屍と 苦つるとも

東亜の大義に 生きるべし

ああ 感激の 防人よ

今 尽忠の 秋来る

今、考えて見ればあの時の体験は言葉では書き表せないけれど、いつまでもいつまでも目に浮かぶ・・・。なくなった戦友同志の死は「国想う」「幸福の死」・・・かもしれない。心から御冥福を祈る。

私の戦争体験

南 武雄

支那の子供が、盗んできた目覚時計をジリジリと鳴らしながら部落の道を歩いていた。又、道の傍らに四、五人の子供達がたむろして、サイコロを振って賭け事をして遊んでいた。前方の村落でもうもうと黒い煙が上がっていた。

昨日の激戦で火事になり、ずっと燃えていた。北支の広野の道を足裏に豆を出かし、痛さを歯を喰いしばって堪え、全身汗と埃にまみれて歩き続けた。日が暮れはじめそのうちとつぷりと暮れた。

部落の各所で家が燃え続け真紅の災がメラメラと上がっていた。行軍は四キロメートル程前進し小さい部落の入口前のクリークに架かった土橋を渡った。クリークの水の上に小柄な支那兵が下向けになり死んでいた。合掌して通過した。その周辺に支那軍の鉄兜弾丸弾帯や銃が散乱していた。無残な戦闘の跡であった。

或る日、残敵掃討作戦に参加した時一日中壕から出る事が出来なかった。前方に敵の大軍が陣取り、頑強な抵抗をした。四方八方から銃を浴びせられ必死になって応戦した。私の横に射撃していた新兵の首に敵弾が当り、生温かい血が四散した。応戦に懸命であった私は助ける事もできなかった。塹壕を横伝いに走ってきた衛生兵が応急処置をした。新兵は首が痛い痛い呻きそのうち母さん母さんとうわ言を言った。間もなく呻き声もうわ言もびったり止んだ。天皇陛下万歳も叫ばずひたすら肉身を呼び続けて死んだ。兵隊とは勇ましくも強くもない弱い心優しい平凡な人間である。もしも私に弾丸が当たって死ぬ時果

たしてどんな死にざまをするだろうと考えた。私も戦死した新兵の如く天皇陛下万歳も叫ばず肉身の名を呼びながら死ぬだろうと思った。戦争とはお互いに憎しみもないのに殺人行為をする全く人道に外れた現世の最大の悪である。

戦場では敵も味方も殺人、強盗、強姦、放火等の罪悪を平然と実行する場所で、銃後の内地では手錠をはめられる極悪人のレットルが張られる。戦争とはこんな矛盾があるのです。実に無駄、無意義、残酷で大義名分もなく暴力が横行する所です。

昭和二十年八月十五日日本軍が天皇陛下の命令で連合軍最高司令官マッカーサー元帥に無条件降伏した。マッカーサー指令で「武力放棄」の新憲法が確立された。戦前の憲法下で一銭五厘のハガキ一枚で戦場に送り出された。そして死闘した。戦後の資料に依ると戦死数は三百三十万人にも達した。その頃の青年達の犠牲はあまりにも大きかった。人間一生で一度切りしかない尊い生命をむざむざと散らした。あれから四十数年経過した今でも戦争の傷痕が残っている。その傷痕は五十年経過してもまだ癒えていない。

皆さんは、よく現行の平和憲法を勉強し厳守することこそ、日本が戦争を起したり又他国の戦争に巻き込まれない為にも平和憲法を守ることが唯一の方途である。戦争を体験したおじいさんの率直な意見です。

戦争絶対反対！日本の為、未来あるみなさんの為にも。

爆弾の雨 空襲のこわさ

一九四四年（昭和十九）、アメリカ軍は日本軍からうばったサイパン島に空軍の基地をつくると、当時としては世界最大の爆撃機といわれたB二十九などを使って、日本本土への本格的な空襲をはじめました。

東京をはじめ、国内各地は、夜も昼もB二十九の空襲をうけ、主要な都市はほとんど焼けつくされてしまいました。工場も鉄道も町も、どんだん爆弾の雨にさらされて、多くの人が死んだり傷ついたりしました。

日本空襲にとんできたB二十九の数は、述べにして一万七千機、落とした爆弾十六万トン、被害を受けた人九百二十万人、死んだ人四十二万人、焼けた家の数二百二十万戸というおどろくべき数字が、空襲のものすごさを物語っています。

北陸では、石川県は空襲らしい空襲はありませんでしたが（爆弾は落ちなかった）、富山や福井はB二十九の空襲で大きな被害を受けました。

富山市は、昭和二十年七月二十日から八月一日まで、三回にわたって空襲をうけました。そして、およそ二千人が燃えさかる炎の中で死んでいきました。

夜空にまっかにそめる富山の空襲のすごさに、七尾市では子どもたちの疎開が本決まりになったほどです。

越路でも、夜となく昼となく、警戒警報のサイレンが鳴りました。学校では、サイレンが鳴ると、すべてのことを放り出して、防空頭巾をかぶって裏山へにげました。

夜は、明りが外へもれないようにして、いつでも逃げ出せるようにし、じつと息をひそめる不安な夜の連続でした。

この章では、実際に空襲にあった人の体験談など、「七編」がよせられています。

大阪、名古屋、富山の空襲のようすから、空襲のおそろしさが生々しく語られています。

大阪第一回空襲

山本 清（当時十八歳）

一 大阪の空襲

忘れもしません。B二十九による大空襲です。

大阪市東区の電話局の近くに住んでおりましたが、当時もちろんなその周囲の家は強制立退きで広場になっておりました。

三月十五日の夜、けたたましい空襲警報。間もなく、轟々と紀伊半島方面からの大編隊B二十九の凄まじい音と共に、夜の空に焼夷弾が落とされました。

初めて見る敵襲、それは、一つの火の玉がパツと五つに分かれてずんずんと降りてきて、またそれが各々次から次へと分列して、火の弾が無数に落ちてきました。

父が防犯部長でしたので、私達も一生懸命消火に務めました。空から降ってくる火の弾には焼石に水です。見る見るうちに、燃えだしました。その明るみの中に、私は見ました。低空に飛んできた敵のアメリカ機のマークを。はっきりこの目で見ました。その時、思わず背中がゾッと寒くなりました。

「もう駄目だ。電話局の空地へ避難せよ。」の声がしたので、私達は熱さに備えて、防火用水の中へどんぶりと着のみ着のまま身体をつけ、無事空地へ避難しました。

誰が持ち出したのか、洋服の箱が熱のいきりでポーツと燃えています。火の熱の勢いで、誰も顔が煤けて赤黒く、目は充血し、ひりひりと哀れでした。滅茶苦茶に痛みつけられ、やつと朝が来た時、私達親子は無言の中に抱き合って命あつたこと喜びました。このひどい仕打ちは戦災に会った者でなければ分

からないでしょう。

翌朝やけ跡から、姉が夕方仕立ててあつたお米が回りは黒くもえ、真中の方だけが食べられて、大変助かりました。

鉄筋の建物に安心して避難した人達は皆焼死し、戸外に出ている者が助かりました。

第二回の空襲は明るい昼でした。住友にいた都合で、大阪駅の近くの肥後橋におりましたが、一瞬の間にもえ上がる煙で、鼻をつままれても分らないくらいに真暗らになりました。

見ると、大阪駅の荷物を満載した貨物列車が、炎々ともえ上がっておりました。

何度かの空襲の度に、ビルの地下で避難、敵機襲来の声に皆うつ伏せになり、両手で固く目と耳を抑え、口を開けて敵機の通り過ぎるのを待ちました。

肥後橋の柱に縛られた馬が、油脂焼夷弾に当たって荒れ狂っている様子も忘れられません。本当に地獄そのままでした。

二 疎開

空襲警報で、いよいよ母の里である石川県へ疎開することになり、姉も私も会社をやめ父と大阪駅を出ることになりました。

汽車を待っている間も、無事石川県へ行かれるのか不安な気持ちで、誰ひとり物を言わず、とろんと下を向いたまま、スピーカーの声を心細く聞いておりました。

「皆さん、もう大阪も明日、今夜、どうなるか分かりせん。

どうか無事に目的地へ着かれることをお祈り申し上げます。」
お別れの印として、乾パンを二包ずつ下さいました。

走る汽車の外に、京都あたりの大きな蛍の燈が心を和らげてくれしました。

★強制立退き★

都市の建物の密集地域が空襲を受けたとき、少しでも延焼をくいとめたり、すぐ避難できるようと、無理に他の場所に引越すように命ぜられました。

建物強制疎開ともいわれ、昭和十九年ごろ始まり、とりこわし作業は、当時の中学生や女学生がそれにあたりました。

★焼夷弾★

B二十九の爆撃機から、雨のように落ちてくる爆弾で、ものにあたるとたちまち火をふきます。

シューシューと凄まじい響きを出し、火をふきながらはしり、ものにつきささり、火をふき上げ、あたり一面にもえ広がります。

爆弾を落とすとき、もえやすいように油もいっしょに撒きました。

名古屋大空襲とお産

寺西 千代

三月二十五日の大空襲

寺西 千代

昭和二十年三月二十日は長男の誕生日で、その日は、空襲でびくびくしながらのお産でした。

産婆さんの話では、まだ畳の上で産まれるのはよい方で、防空壕の中でお産をしておられた方もあるそうです。無事男子出産でした。

二十五日は大空襲で、朝からB二十九がどんどんどび、もう生きた心地がしませんでした。

とうとう私達の町内にも爆弾が落ちました。私の家にもシューと爆弾のはへんが柱にあたり、「ドン」の音で三歳の女の子をおんぶして、生まれたての子供をだっこして表に出ました。外はもうどういってよいかわかりません。私の身もよごれているのと、死ぬのなら家のなかでと思い、また、家に入りました。

おさまった後も外は大へんでした。

近所の人達が何人も亡くなられました。また、町内会長さんが屋根の上をけいびきしておられました。一緒にいた方もたくさん亡くなられました。

電気も水道もとまり、それから毎日、水は古い家の井戸水をもらいに通いました。

私達のいた名古屋は本当にひどいことでした。

私達は名古屋の中村公園のすぐそばに住んでいました。日赤病院も近くにありました。

三月二十五日、私達の町内に爆弾が落ちてきました。B二十九が百機ぐらい組んできて、最後の飛行機が落としていったのです。

名古屋は工業地帯でしたので、三月や四月頃に大部分焼けてしまいました。

夜は、初めに照明弾をたくさん落として、そのあとから、焼夷弾や爆弾を落としていきました。

そのころ、家庭にはけむりを出すな、光を出すなで、せんたく物まで家の中で干していました。

また、艦砲射撃といって、船から大砲をうっている音がドンドンとしていました。

ある日、飛行機が屋根近くまでおりてきたかと思うと、「カチン」と音がしました。何の音かを見ると、瓦はぐちゃぐちゃになり、壁もひびわれになっていました。近所の人達と、「おそろしかったね。」

と言ってすごしたこともありました。

その後、班ごとに井戸を掘ってもらって水を飲んでいました。水道やガスがついたときは、ほんとうにありがたいと言って喜びました。

富山大空襲

松田 茂子（当時十六歳）

昭和二十年八月一日

「富山市全滅」の予報が入り、準備に大変だった。

病院では、防空壕完備や、少しでも動ける患者さんの急きよ退院等。残る患者は、三、四名で病院はとても静かになった。

当日は夕食後早く入浴をすませるようにとの舎監の言葉。寄宿舎は平素よりなごやかだったが、間もなく、予報どおり

「警戒警報発令、B二十九爆撃機、富山に向かって進行中。

「空襲警報発令。」

ウウ・・・サイレンの警報。

今し方まで、本当に空襲はあるのだろうか。デマではないかと思っていました。とうとうきたーって思いました。皆、順序よくそれぞれの部署に散った。

私は当時、富山県赤十字病院の研究室実習生だった。顕微鏡一台持って避難する役があった。大きな白木の箱に入ってとても重かった。小さい私が持つと地面すれすれ、引きずりそうだった。でも、役割をはたすため必死に持って病院の前へ出た時、もうB二十九爆撃機は富山上空を旋回していた。何機だったか、焼夷弾が雨、あられのように投下。

夜十一時頃、身を護る外套、防空帽、鞆一つ。

「郊外へ行った方が安全だ。」

という声が聞こえた。歩いている一メートル前へ焼夷弾が落ちたが、運よくさけて通った。

どれくらいの間と距離を歩いたのか。気の付いた時は、田

んぼの稲をかきわけかきわけ踏み倒して逃げていた。

でも、すっかり顕微鏡だけは持っているのに気が付いて、重たくやりきれなくなつて田んぼに捨ててしまった。

さらに逃げた。

大きな農家の庭先にたどり着き市内をふり返った。

午前二時くらいだったろうか。もうもうと煙が立ちのぼり、その上空をゆうゆうとまだB二十九機が旋回している。空が赤く染めたように見えた。

朝早く農家では、庭いっぱいの人達におにぎりのたきだしをしてくださった。白いご飯で嬉しかった。

暫く休んだ。市内へ帰る道路は遠いものであり、とてもむごいものだった。

「助けて下さい。助けて下さい。」

とすがりつく人々。黒こげの死体。焼け残った蔵の窓から火がふき出して地獄そのものだった。それでも病院のある場所まで、暑さと空襲で焼けた道路はあつくて、火傷しないかと思ひながら歩いた。

焼野原となつた病院のあとに、三々五々集まって顔を見ると、皆、

「よかったね。」と泣いた。

いつもわたしの横にねていた絵の好きだった宮崎さん。逃げ遅れて近くの川へ避難したが、最後に投下した焼夷弾の直げきを股関節にうけ助からないだろうということだった。

また、皆に、

「早く風呂を。」
と進められた舎監さん。

風呂で裸のまま亡くなられたと聞き、涙でした。動けるはずの
なかつた患者さんが防空壕へ避難し助かりいろいろでした。

八月十五日 終戦

あの焼野原にも、一軒一軒バラックが建ち病院も建った。

田んぼの刈り入れも終わった頃、捨てた顕微鏡が病院へ届け
られたとき、とても喜ばれ感謝されたが複雑な気持ちでした。

富山市全滅時、ここ越路から夜空が新赤だったと聞きました。
毎年、広島、長崎の原爆記念日が報道されると、あのむごか
った富山の空襲が目に浮かんでジーンとくるのです。

再び戦争のないよう願うものです。

★B二十九★

第二次世界大戦がはじまると、長距離爆撃機の製造を計画し、
つくられるようになったのがB二十九です。

昭和十九年からアメリカ軍は占領したサイパン島を基地とし
て、このB二十九で日本の都市をつぎつぎと焼きはらっていき
ました。

富山の空襲のこと

高柳 ツデ（当時二十七歳）

一 富山大空襲

昭和二十年八月「隣保班」の当番で夜警をしていた時、空襲警報が出て町内の各戸にふれて歩いていました。その時B二十九が一機だけ町の上空を越えて、輪島の方へ飛んで行ったのです。

その後、B二十九の大編成が富山の方へ飛んで行き、爆弾の投下を始めました。当日は素晴らしい月夜で、爆弾のさく裂する明りと月の明りで、上空から爆弾の投下されるのが、肉眼ではつきり見えました。

地上からはサーチライトで敵機を照らすのですが、味方の飛行機は一機も見えず、私共は、近所の人々とただオロオロするばかりで、サーチライトは敵のスパイの仕業などと言いつけていたものでした。

二 米の供出のこと

戦争のために、日本は食料が不足していて、農家は作った米やじゃがいも、さつまいもにいたるまで全部供出して、その後、改めて配給を受けて生活していたわけです。

あるとき、受けた米がクズ米で、それも隣部落の人の供出した物であったのが、夫も応召で家にはないので、馬鹿にされたようで、大変くやしい思いをしました。

女手だけで精一杯働いて、きれいな米を残さず全部供出した

あとだけに、特に腹だたく感じました。

富山空襲

高柳 助太郎

「空襲」四十年ほど遠く去ったはずのこの言葉。今でも聞くと、何か重々しいものがおおいかぶさるような気持ちになる。私どもは、幸いにして、この言葉を聞くだけで体験したことはありません。

然し、あれは確かな日は忘れましたが、昭和二十年の七月のある夕方だったと思います。けたたましい空襲警報のサイレンが鳴りひびいてきました。警報には馴れてきているとはいえ、直ぐ南方より、アメリカの重爆撃のB二十九の爆音が聞こえると、あわてて防空壕のない私共は、妻が二歳になる長男を背負い、前からいい合わせていた大川（私共の傍を流れる石塚川）の橋の下へと逃げこんだ。

しばらくして辺りがうす暗くなった時、東の空が真紅になり、何事か音さえ聞こえてくるように思われた。

後でラジオの放送によると富山市が空襲を受け、大火災になったとのことだった。

それから約半ヵ月後、広島と長崎の原爆投下となり、日本の大被害が起きたのです。

これらの被害を実際に受けられた方々のおくやみの申し上げる言葉もありません。

富山県空襲の時、面白い挿話を一つ。

それは、私の妻が長男を背負って防空壕の代わりの大川へはいろいろとした時、当時六十二歳になる私の父がいたので、これ連れていくべく呼んだが、何だか家の中にいる様子なのになかなか出て来ない。いらいらして待っていると、やっとなんか出て来

たので、一緒に川へはいったのですが、後で何をしていたのかと聞くと、禪を替えていたのだそうです。

「もし、空襲のためどこかで死んだなら、その時、禪がよごれていたなら、家中みんなの恥だからなあ。」

とのことだった。

いかにも昔気質の笑い話ですが、これは作り話ではありません。今では、この父も昭和三十四年に死去いたしました。

空襲警報

勝山 修正

★広島・長崎の原爆投下★

一九四五年八月六日広島に、九日長崎に世界に初めての原子爆弾が投下されました。

ピカッとするどい光が一瞬ひらめき、その直後巨大な火の球となり、はげしい熱線や爆風、放射能が生じ、文字どおりの「生き地獄」となり、両都市は全滅しました。死者行方不明者は、広島で約二十万人、長崎で約十万人といわれています。

そのとき生命の助かった被爆者（三十万人以上）の中には、今でも放射能におかされ、原爆病で苦しみながらの病院生活を過ごっている人がたくさんいます。

また、なくなる人もあとを絶ちません。

それでも、世界各国は核の開発と増強競争を続けています。

現世界で約五万発の原子爆弾があるそうです。

その力も強く、広島や長崎で落とされた原子爆弾の数百倍の威力をもっている爆弾もあります。

毎年、広島や長崎で原水爆禁止世界大会や平和祈念式典が行われ、石川県からも多数参加し、平和の誓いを新たにしています。

空襲警報・空襲警報・ウーウーウーとサイレンが鳴り響く。

さあ大変、B二十九だ。

家には年老いたばあちゃんとかあちゃん、僕と一歳になる弟。

父は戦争にとられ、家には女、子供だけ。サイレンの鳴り響く最中、外に飛び出さなくてはならない。

家の中には、たった一つの裸電球、かさには黒いアコーデイオンのような紙袋。その袋を下げて電気を消し、かあちゃんは弟を背に負い、僕をほうり出すように外に出すのだった。

（その頃、僕ら子供はB二十九が来るぞ、B二十九が来たぞと言われると、泣く子どもだまる？ほどだった。）

子供だった僕には、その時は夜のことなので、眠くて眠くてたまらなかつた。それで、はっきりとは覚えていないが、西の空から東の空へ流れ星のように灯りが、（でも、少し大きかった？）飛んで行ったような気がしている。

僕は眠いし怖いし。

外にはカマスが置いてあり、カマスの中で寝かされた事をおぼろげに覚えている。

当時は四歳から五歳だったので、はっきりしませんが、このようなことだったと思います。

さみしさこらえて・・・学童疎開

戦争の末期です。

アメリカ軍の空襲が激しくなり、その被害は全国に広がりま
した。

それで、今は一人前ではないけれど、将来必ず兵隊となつて
充分戦う力となる小学生だから死なせてはならない。だから、
空襲のあまりない「いなか」へ移して生活させよるように、と
いう指令がでました。これが「疎開」です。(老人や病人に対し
ては疎開の指令はなかった。

はじめに、地方の親類をたよって疎開をしている子どもが多
かったのですが、いなかに親類のない子どもはどこへもいけま
せん。

それで、「いなかのない子ども」は、学校まるごと空襲のない
地方へ疎開するように命令がでました。

越路へは、大阪府守口市滝井国民学校の子どもたち約百名が、
八名の先生やすいじ婦さんといっしょにやってきました。

昭和二十年四月二日午後六時、列車で良川駅につきました。
そして、芹川・泉福寺、徳前・仏乗寺、二宮・受念寺・長賢寺
の四カ所にわかれて合宿生活をはじめました。

子どもたちにとつて、何ヶ月も親とはなれてくらすのは大変
なことだったでしょう。思ひは、いつも遠くはなれた父母や家
族のこと、それに食べ物のことばかり・・・。

なれない土地ではじまった生活の不安とさみしさに、じつと
たえながらすごした毎日だったにちがいありません。どうにも
ならないつらい事もあったでしょう。でも、みんな戦争での勝
利を信じてたえていたのです。

この章では、疎開してきた子どもたちのお世話をされた方のお話をもとにして、当時の疎開の子どもたちのようすを記録された文がよせられています。

学童疎開

長澤 隆静（当時四歳）

私の家は二宮で、石動山の登り口の長賢寺という寺です。昭和二十年、当時私は四歳でした。これからかすかな私の記憶と、父と母から聞いた学童疎開の様子をお話します。

昭和二十年三月、戦争は日毎に激しくなり、東京や大阪では、田舎の親類を頼って疎開して行く人が多くなりました。しかし、田舎に親類の無い人達は、どこにも行く事ができず毎日不安な生活をしていました。

大阪府の守口市の滝井小学校では、このような家庭の子供達を、学校の先生が引率して疎開することになり、私の寺へは二人の先生と給食婦さんが、四年生から六年生の子供達四十人を連れて疎開してきました。

子供達はやせて、色が白く、目だけが光っていました。服装は、男子は服を着ていましたが、女子はモンペに標準服（着物を改良したもの）という姿でした。

子供達は本堂で寝起きし、毎日の生活は、朝起きると、水汲み（手おしポンプ）をし、顔を洗うと本堂の仏様にお参りをし、朝御飯を食べ、午前中は勉強や歌などを歌うことでした。子供達の歌は、「トントントンカラリと隣り組・・・」「緑の丘の赤い屋根・・・」等でした。

午後は、山へたき木や山菜を取りに行き、又、畑に芋のつるをもらいに行くことでした。たき木は、食べ物の煮たきや五衛門風呂の燃料として使い、わらび、ふき、芋のつるなどは三度の食事に配給品に加えて食べました。子供達の御飯は、芋のつるや豆がたくさん入ったものを食べていました。

夜は、電燈の笠に黒い布や紙を巻き、光が外にもれないようにした暗い中の下で、女の子は兵隊さんに贈る千人針の仕事をしていました。そして、先生と静かに話等をしながら一緒に眠っていました。枕元には、防空頭巾と水筒、帯の芯で作った避難袋がきちんと並べてあり、空襲があればいつでも逃げることができるようになっていました。

子供達は週一回、全員で守口市の両親に手紙を出していました。しかし、返事はあまりきませんでした。きつとお父さんは兵隊に行き、お母さんは空襲等で逃げまわっており、返事を書くことができなかったのでしょう。子供達は毎日淋しくて人恋しさがつのり、私の父や母によくまつわりついていました。

夏のある日、私の父が友人に頼んで子供達を海水浴に連れて行きました。朝早く、二宮を歩いて出発し、鳥屋町の山を越え、高浜の大島海岸に行きました。子供達はたいへん喜んで海水浴をし、先生や父や母は漁師さんから買ったいわしを開いて海水で洗って浜辺で干しました。帰りは、干したいわしと小さな入れ物に入れた海水を子供達が持って帰ってきました。海水は塩のかわりに使いました。食べ物の乏しかった当時、子供達は自分達の干したいわしを本当に喜び、宝物のようにして食べました。

昭和二十年八月十五日、日本は戦争に負け終戦となりました。子供達の両親が次々と子供達を迎えにきました。九月の終わり頃、最後に残った十五人程の子供を先生が連れて守口市へ帰って行きました。

それから十七年後の昭和三十七年の夏、宮本さんという青年が寺をたずねてきました。その青年は疎開していた子供の一人だったのです。宮本さんは、

「寺の周辺が変わっていて、なかなかわからなかったが、石動山登り口の石の里程標を見て思い出しました。」

と言っていました。その夜は一泊し疎開の時の苦しかった事、悲しかった事、楽しかった等を私の父と母と共に涙を流しながら話していました。

その後、多田羅さんという女の人もたずねてきました。この人も疎開していた時のことが忘れられないと話していました。

このように戦争は、世の中の苦勞を何も知らない楽しい時期であるはずの子供達にも大きな影響を与えました。

今、私達は平和で豊かな時代に生活しています。再び戦争を繰り返さなければいけないという事を心に誓い、そして、戦争で亡くなった人や私達を立派に育ててくれた父や母に感謝し生活していかなければならないと思います。

朝鮮人・中国人を使って 敗戦前後のようす

太平洋戦争の末期は、国外ばかりでなく、国内も戦場となりました。多数の国民が身をもつて戦争の悲惨さを体験したのは、本土空襲と沖縄での戦いでした。

沖縄戦は激烈な戦闘がおこなわれ、当時四十九万人の沖縄県の人口のうち、二十万人が戦死しています。

このころ、日本は約七百二十万人の男子を軍隊に兵としてあつめていたので、国内の働き手は極端に不足していました。子どもも、大人も、残った者で働ける者はすべて食料増産に、武器生産にと働きました。しかし、それでも働く人の数も力も不足しました。

このため、日本政府はたくさん朝鮮人や中国人を強制的に日本に連れてきて、鉾山やトンネル掘りなどの危険な仕事をさせたり、港の荷あげ作業などの力仕事をさせました。

栄養も量もたりない食事と、きびしい作業のために、多くの人が病气やけがで命を失いました。

つれてこられた朝鮮人一五一人、死者は六万数千人、中国人は四万人、死者は六千八百人の多くを出しています。

七尾では、約四百人の中国人が港で荷上げ作業をさせられていました。今のP・SコンクリートKKの横にある粗末な建物に生活させられていました。

越路小学校の旧体育館（講堂）に、戦争中、山のように積みあげてあった軍隊用の大豆は、満州から船で持ってきたものです。それを七尾の港で中国の人達が荷上げしたのも、その仕

事の一つでした。

八月十五日、ようやく戦争が終わって中国など連合軍は日本に勝ちました。しかし、日本が負け、中国が勝ったことを七尾の港で働く中国人に知らせず働かせたので、やがてそれを知った四百人の中国人は大変おこり、大さわぎになりました。

この戦争を通じて、朝鮮人や中国人に日本が何をおこなったのか、日本人は決して忘れてはならないできごとなのです。

戦争が終わっても、国民生活は急にはなりませんでした。塩がなくて、荷車におけを積んで羽咋の千里浜まで海水をくみに行ったり、わずかに残った着物をもつてこみあう汽車のつて米を交かんに行ったりの生活でした。

でも、みんな空襲におびえることのない明るい夜がかえってきたことにほっとし、平和の尊さをかみしめました。そんな中で、大阪の滝井国民学校百名の子どもたちも、昭和二十年十月十六日、なつかしい父や母のもとへ帰っていきました。

この章では、こんな敗戦前後の「光」と「影」のようすを「二編」の体験記録がくわしく伝えていきます。

物不足と食料難のきびしい日々

楽満 きくみ（当時二十歳）

私たちは戦争の恐ろしさ、敗戦のみじめさを忘れてはならないと思います。でも、戦後三十有余年、時の流れ、そして、あまりにも満たされた平和な暮らしは、そのつらさ、苦労を忘れさせがちでございます。

私は昭和十二年春、越路尋常小学校を卒業し、すぐに十二歳で織物会社に働きに出されました。満州事変、日中戦争、太平洋戦争と戦争が続き、青春時代は節約節約と言われハイカラな事は国賊とののしられ、「パーマネントはよしませう。」という流行歌もありました。

戦争がはげしくなるとだんだん物資も不足して生活必需品はすべて配給になりました。廃品を生かすことが生きがいと思い、祖母の木綿の古着でモンペを作り、人絹のはしきれでブラウスを作りました。

大東亜戦争（私たちの世代は、太平洋戦争をそう呼称するよ）うに教育されました。もシンガポールや、遠く南方まで戦場が広がりきびしさが増してくると、大きな織物工場、越路織布なども軍需工場に変わっていききました。私も、はじめは徳田の工場（飛行機の部品を作っていました。そのうち二宮の工場に異動になり、遠く愛知県半田市へ講習を受けに行き、装備板を作ることをならってきました。徹夜、残業と少しでも収入を考えが）んばりました。夜食にでる麦の粉でつくったおだんこの浮いた雑炊を、行列をつくって、皆舌づつみをうって食べました。

昭和二十年一月、私も年頃となり、お嫁に行くことになりましたが道具などありません。母がお嫁にきた時の黒く塗ったタ

ンス一本と、やなぎごうり、粗末な品でしたが、鏡台、衣桁、下駄箱と新しくそろえてもらいました。その時代の反物はすべて人絹が混じっていてしわがいき、水に弱くテトロンのようにじょうぶではありませんでした。母は物々交換などをし、なけなしのお金を払い、古着でしたがウールや絹物を少し用意してくれました。下駄一足が、お米一升五合から二升の値で、それも七尾まで歩いて行きさがすのに又ひと苦労だったと言っておりました。母の時代、下駄は一生はくだけあつたと言っていました。母の時代、下駄は一生はくだけあつたと言っていました。母の時代、下駄は一生はくだけあつたと言っていました。母の時代、下駄は一生はくだけあつたと言っていました。

人絹の鼻緒はすぐ切れて布ぎれで変わりをづくりかえたものです。ふだんばきの下駄は縄の緒を立てたものです。非常時であり、貧乏人の娘でもあつたのでなおさらのことと思います。モンペをはき、雪道をてくてく歩いての嫁入りでした。簡素なものでした。その時代は黒の留袖、つのかくしの花嫁姿はできませんでした。娘ですから一度花嫁衣裳を着てみたかったです。今の時代の花嫁さんは豪華な衣装を何度もお色直しを聞いています。そんなことなど考えられない時代でした。

昭和二十年八月十五日、一億の国民が一丸となって戦った戦争も敗戦となり、生活はますますきびしくなりました。食料難で、ねこの額ほどのわずかな土地も拓き、さつまいもやじやがいもをつくりました。私の嫁ぎ先は農家ではなかったのをわずかな貯えで土地を買い、慣れない百姓をすることになりました。空腹を満たしてくれる物は「おぞろ」といってお米一合に水をたくさん入れ、いろいろな物を入れておみそで味付けしたおか

ゆです。祖母と三人で分けて食べました・

オオバコ、ヨメナ、ヅンベラ、タンガラシという野草も摘み入れました。小麦、じゃがいも、さつまいもなどは最高の代用食でした。また、越冬にそなえ、遠く氷見市お滝角間の山にジョウブの木を葉をとりに行き干しておきました。大根葉は漬けて込んで貯蔵しました。おしんちゃんの大根飯もまずかったです。私もうろいろな物を食べました。ある時、何か黒い馬ふんのかたまりのようなものが配給になりましたが、これはどうしても食べられず、おおかた捨ててしまいました。お魚は、鳥屋の山を越え、高浜の海までイワシをとりにもらったり、原山の池のふなをつつてきたりしました。秋はイナゴをとって栄養源にしました。今はイナゴなど一匹もいませんが、その頃はたくさんいてけっこうおいしかったです。

先日、京都のおばあさんと思い出話をした中にこんな話もありました。お米の中に小さいコクゾウ虫がたくさんたくさんあった時、コクゾウ虫をふるいわけ、いって、焼き塩とふりかけにして子供達に食べさせたことがあると言って笑っておられました。今では何もが懐かしい思い出となりました。現代は消費文化が進み、使い捨てのゴミの山です。資源の大切さを知らない現代の子供の行き先が案じられます。

終戦の前後

村守 隆一（当時三十六歳）

終戦の二年ほど前ごろから、人も物も足りなくなっていくのが、ひしひしと身体に感じるようになって、戦況が日に日に悪くなっているように思われました。

昭和十九年、私は徳田国民学校の教頭でしたが、男の先生は召集されて出征されるのでほとんどいなくなり、そのたびに女学校を卒業した娘さんのいる家をさがして、学校の先生になつてくださるよう頼んで歩いたものでした。

だんだん物が足りなくなつて、子供たちと山に合宿して炭を焼いたり、夏は海べの村の学校にとまって塩を作つて、落穂拾いした米と学校で作つた豆で味噌を作つて給食したものです。

また、みんなで干し草をつくつて軍馬のえさを送つたり、飛行機をとばす油が足りないというので、松根油をとるのに山へ行つて古い松の根かぶを掘りおこして出したり、学校や家の空地に「ヒマ」という植物を作つて、その種を出したりしました。

また、お寺の釣鐘は一つのこらずとり外して兵器の原料にされ、家々の仏だんの仏具など、金物が集められました。

こうして勝つためにみんながいっしょうけんめいにつとめたのに、次の年の昭和二十年ごろになると、ボツボツと悲しいうわさがささやかれるようになりました。

召集されて戦地へ行つた兵隊さんに、鉄砲が足りなくて、持たないものがあるとか、竹ざやの剣をつくつていたりとか、靴がなくてわらじをはいて戦つていたりとか、コソコソ話し合つていくようになります。

昭和二十年の春から大田国民学校の校長としてつとめること

になりました。

その学校はいまはないけれど、七尾の波止場からながめると、東がわの山の高きわに、高いガケが見えるのが大田のガケです。

ガケの右どなりの小高いおかの上にある学校のまどから、能登島や七尾の町並、その間にある青い海がよく見えました。

大田につとめるころになると、学校の近くの海に、海軍の飛行機が五、六機と水兵さんがたくさん来て泊まることになりました。村の家にかかれてとまっている水兵さんたちは、後ろの山に、あな（防空ごう）を掘つて、空襲にそなえました。

陸軍の兵隊（暁部隊）も七尾に来て、各学校にとまり、港の倉庫においていた中国人の捕虜を使つて大豆を陸あげして、各学校の体育館などに貯えました。

七月頃になると、能登島沖に軍艦（駆逐艦という小さい軍艦）がとまるようになりました。また、アメリカのB二十九爆撃機という大きな飛行機が昼でも七尾の上空に飛んでくるようになりました。学校の窓からも、とてもとても高いところを三機ぐらいでゆうゆうと飛んでいるのを、何度にもくらしげに見ました。B二十九は七尾湾の入り口に爆弾を落としていききました。七尾湾へ入る船をさまたげるためだったのでしよう。七尾湾の入り口には沈んだ船が何隻もありました。

となりの富山が空襲されたのはまもなくでした。その晩は、学校の運動場からも燃える火が赤く大きく見えました。そして、八月十四日に、

「明日、お昼に重大放送があるから、みんな聞くように。」

ということでありました。それは、天皇陛下じきじきの終戦のお言葉でした。これを聞いた人々は、みんなびっくりして、どうすればよいかとまどったものでした。アメリカ兵が上陸してきて何をするかわからないと言って心配しました。

数日してから、矢田新にいる中国兵の捕虜が四百人ほど、町の中をあげまわっているから町へ出るなといわれました。捕虜たちは、町で人を見つけると、時計や万年筆などを取りあげ、やらないとなくってけがをさせられたとか、勝手に店へ入ってきて何でも手当りしだい奪っていくのが恐ろしくてたまらないとか、けがをさせられた人が何人もいるとかいううわさが聞かれました。

このさわぎもどうやらおさまって、八月の終わりごろには、大田にいた海軍の人たちは、壕の中に貯えてあった物資をかっげるだけかついで、めいめい自分の故郷へ帰っていきました。

また、一方、召集されて内地にいた人たちもぼつぼつ帰ってくるようになりましたが、これからもたいへんな混乱が続いたのです。

終戦前後の思い出

高柳 信一（当時三十七歳）

一 食料の不足

戦争の末期には海外へ派遣されている三百数十万の将兵へ送るため莫大な食料が必要であったが、輸送の途中で敵の攻撃のため海底へ沈没するため、国内の食物は極度に不足し銃後の国民は毎日食料の増産のため苦しんでいたのです。

学校の運動場は、いもや野菜作りにつぶされ、道路の横には大豆やその他の食用作物を作る状態であり、海岸の学校では海水から塩を作るのにけんめいでした。銃後の国民は、いも、かぼちやのお粥を食べるのが普通でした。その頃お菓子などはどこにいつてもなかったのです。その頃と今と比べると、どこのお店へ行っても様々な食物がありあまるほどたくさんあるのに驚くのであります。

当時のことを思えば、一枚の紙、一本の鉛筆でももつと大切にしてほしいものです。

二 武器弾薬の不足

私は当時三十七歳で、御祖国国民学校に勤務していましたが、戦争物資を少しでも補うため、生徒を連れて山へ芋麻取りに行つて、学校へ帰る途中に赤紙の召集令状を受け驚いたのですが、八月五日最後動員であったようです。第二百九師団の特設部隊の迫撃砲隊でした。最後の国土防衛部隊であったようです。だが、各兵が持つべき帯剣すらなく、迫撃砲一台もないという

あわれな状態であり、いかに兵器が不足していたかが分かると思います。これでは、いくら大和魂があつても戦争に勝てるはずがないことを覚悟しました。毎日のように日本の都市がB二十九の爆撃機に次々と破壊され、これを迎えうつ航空機もなかったようです。戦争用のあらゆる物資が欠乏していたのです。それでも、初年兵の教育に専念していたのですが、ついに八月十五日終戦の招勅が下つて終戦となりました。

今になって思うことは、二度と野望にもえた戦争はやってはならないと強く反省させられたのです。幸いに今日まで日本は平和に徹して努力したので立派な国となりました。

三 世界平和への努力

第二次世界大戦の結果、二度と戦争はやらないと世界各国が誓ったにもかかわらず、各国の利害が衝突して戦いが絶えないのが非常に残念なことです。中でも、原子核による戦争などが起きる場合は地球上は全滅の状態となりますから絶対におきないようにつとめていくのが最も大切なことと思います。

科学の進歩は、今日無限に進歩しておりますが、実に驚くべき科学兵器が作られることが可能になっていくことは恐るべき時代になっております。今後、世界各国はもとより日本国民全体も戦争絶滅のため不断の努力が必要であります。

今日われわれは、むしろ平和のための戦争（努力）が一番大切な時代と考えられます。

戦後の僕達

勝山 修正（当時六〜七歳）

おぞう（今の雑炊）

春は山へ行き、ジョウブの葉（木の芽）、夏はいものつるとサツマイモなどをとってきた。この他、大根のカンナおろしなど沢山の米以外の物をご飯の中に入れて食べた。

この食事は米つぶがおかゆのようになっていて、おぞう（雑炊）と言う。

父が戦争から帰ったというので、白い御飯を炊いて僕達に食べさせてくれましたが、僕と弟にとっては、味付けのしていない白い御飯はまずく、おぞうをつくってもらったそうさ。僕達はおぞうの方がうまいと言つて食べたそうさで、そんな子供を見て、まずいめしで育った子が可愛そうでならなかったと、よく言われた。

イナゴとり

それから小学校へ通うようになった。学校へ行くと、今の運動場のあたりとプールの辺りから、高学年校舎の辺りまで全部畑になり、大豆か小豆（あずき）かサツマイモか作くられていたように思う。

休みの日だったか放課後だったか覚えていないが、何人かの友達と落ち穂ひろいに行き、家に帰ってからはイナゴとりをした。イナゴとりの袋は、今の子供のズック袋ぐらいの大きさで、袋の口は、竹のポンポラ（竹筒）をつけたものだった。イナゴ

を袋いっぱいに入れて、それを学校へ持って行った。今の自転車公園の所に校舎があり、その入り口の左側の調理室には大きな釜があった。その釜の中に生きたままのイナゴを入れてゆでるのであった。食料になるのか肥料になるのかわからなかったが、それが子供達の仕事だったように思う。

サツマイモ

家へ帰れば畑仕事の手伝いだ。でも畑へ行くのは楽しみだった。それは、畑にあるウインナーソーセージのような細いサツマイモが収穫した後の畑の土の中から（雨に洗われて）顔を出しているのを見つけて、手でぬぐい、歯で皮をむき、競争して食べるのが楽しかったからだ。

なぜかわからないが、（たぶん供出したのだろう）畑で作っていたサツマイモは、大きな大きな、時には子供の頭の大きさくらいもある「ゴコク」という品種の白い、本当にまずい（当時でもまずいと思うほどの）ものだった。そのサツマイモさえ満足に食べられなかった。

僕の今日は、それにくらべたら天国のようだ。

工場動員・そして敗戦

大西 可祝（当時十六〜二十歳）

今のオリジナコシジが、戦争が激しくなると、飛行機の部品の工場に変わりました。越路地区の芹川、徳前、二宮、武部のお父さんお姉さん達がそれはそれは大勢集まって来ていました。私も十六歳の頃から入って、部品を削ったりしていました。学校へ通うはずの高等科の人達も来て手伝っていました。その仕事のお蔭で、ドリルの研ぎ方を覚えたり、工具の名前を覚えたりできました。だんだん戦争がひどくなってきた、東京から疎開して来ていた女の子―当時女学校二年のかわいい女の子―も入って来ました。家はお風呂屋さんだったらしいのですが、空襲で焼け出され、着の身着のまま芹川の桜井さんを頼って来たのだそうでした。

そのうち、六カ月も経った頃でしょうか、昼から大事な放送があるから集合するようになると言われて集まったのでした。そこで、天皇陛下の御言葉がありました。今でもこの耳の底に残っています。おごそかな御言葉を、しのびがたきをしのいで聞いていました。みんな泣いてしまいました。日本が負けたんだなと思うと、悲しくて、泣けて泣けて仕方ありませんでした。みんな家へ帰ってから、これからどうなるのだろうかと話合っただけでした。「アメリカの兵隊さんに子供は連れられて行くのでは？」のデマもとんだりしていました。でも、日本には天皇陛下がおられたので、ひどい混乱も起きずに、アメリカの兵隊さんを迎え入れ、皆静かに、平和な世の中にするように頑張りました。

「私の身の上はどうなっても良いから、国民がひどい食料難で

困っているので頼みます。」

と、危険もかえりみず、堂々とアメリカの兵隊さんのたくさんいる所へ、日本を代表して頼みに（天皇陛下は）行かれました。本当に勇気のいる、本当に正しい判断のできる人しかできない事です。お蔭で日本は、立派に立ち直り、戦争前よりも豊かな国になりました。天皇陛下の心を皆で戴き、一生懸命に働いたおかげです。疎開して来ていた女の子は、電通の試験に受かり、電話の交換手になりました。皆で通っていた工場は、元の織物工場になりました。

私の家でその時分、葬式があつたので、お米がなくなつて、田んぼの稲を青刈りして食べました。そのうち、店にパンが出始めました。十円の大きなパンでした。洋服もなかったのも、母の着物を洋服に仕立て直してもらったりして着ました。その頃は、点数がなければ反物も買えなかつたので、赤ちゃんの生まれた家へあげたりしました。

しょう油も配給でしたので、月に五合しか使わない月もありました。石けんも配給で、洗たくもあまりしなかつたので、シラムが村中に広がって、DDTを子供の頭にかけたりしました。年頃になつても良い着物もなく、人絹の着物をこしらえたり、かずきの古着を買ったりしました。その時に古着屋をしてもうけたので、家を建てた時の借金を返すことができると言っておられるおばあさんもおられます。何しろ、何にもない生活でした。今は、その頃からみるともったいない暮らしをしているのだなあと思います。

詩

(赤いちょうちん)

七月二十七日は芹川のおすわ様の日やった

夜はおどり見があつたので

母と一緒に見に行つた

暗い夜道、赤いちょうちんが

遠くから見えた

役場の方から走るように

それが赤紙の使いだつた

越路地区で一番先の

ドーインの来た

赤いちょうちんが芹川へ来た

どんなに仕事が忙しくても

どんなに子供が泣いても

皆笑つて兵隊に行つた

中に、帰つて来ない父ちゃんもいた

戦死したからだ

お国の為に働いて

死ななければならなかつたお父さん達

今の平和の日本を

どう見ていられるでしょうか

(いもん文)

私の書きたいもん文が

向いのお兄さんの所へいった

お兄さんはいおう島にいた

★かづき(かつぎ)

店を持たないで、食べ物や衣類を売りに歩く商売のしかたがあります。お金とかえる場合もあれば、お米とかえる場合もあります。こういうふうに行商して歩く人のことを「かづき」といいます。

★DDT★

のみやしらみを退治する薬(殺虫剤)です。戦地からひきあげてきた人を中心に身体中にこの薬をふりかけました。

毒性が強すぎるので、現在は使われていません。

敗戦後の生活

中原 たまえ

町の体育館の様子を書きたいもん文が

おもしろくて

おもしろくて

皆で笑ったと風の便りに

聞いたけど

そのお兄さんは

帰って来なかった

いおう島が玉さいしたからだ

一人残らず戦死した

でも、いもん文をよろこんで

読んでもらって

私はよかったと思った

★玉さい★

実際には全滅のことですが、それがいかにも男らしくいさましいことであるからのように思わせるために、戦争中使われた言葉です。

★いもん文★

戦地に出かけている兵隊さんをはげまそうと、学校の中でも手紙をかいで送ることがよくされました。その手紙をいもん文といいます。

私が生まれた昭和二十三年、敗戦後三年目で、本当に何もなく、母はミルクの代わりに、お米の粉をお湯で溶かし、配給の砂糖を入れたものを飲ませてくれたそうです。それでも栄養失調気味で、医者から見放されたくらいでした。三つ上の姉はそれで死んでいます。食べるものと言えば野菜ばかりで、さつまいもからあめを作ったそうです。

私が物心ついた頃は食料事情も少しずつ良くなって、余り苦しい思いはありませんが、疎開して来た人達と遊んだことを覚えています。今でも時々、あの人達はどのようにしているかと思いついています。

何にもなく不自由な時代、今のようには物があふれる時代、どちらが子供によいか、時々考えさせられます。

敗戦後の生活

中山 きみの（当時二十歳）

昭和二十年八月十五日、敗戦となり、当時私は二十歳でした。その時の着物は「スフ」といわれる生地で、二〜三組しか持っていませんでした。その二年後に結婚して、四人の子供を生みました。子供はスクスク育ちましたが、おむつは古い浴衣で作りました。枚数も少なく、ズボンなどは破れると継ぎを当て、また破れるとその上に継ぎを当てるといった、かわいそうなくらい粗末な服装をしていました。

家業の農家は主人と二人で、朝夕に星をいただきながら作業をし、家に帰ると腹をすかした子供が待つており、家で作った野菜でおかずを作り、食べ終えれば夜の九時。それからあとかたづけを済ませて休むという生活の毎日でした。主食は米に麦、さつまいも、大根、豆など色々な物を混ぜて食べ、少しでも多く米を売るようにしました。（売る米をたくさん残した。）副食については、畑で作った菜っ葉、大根くらいで、種類も少なく、たまに魚を食べていました。しかし、特別料理の日が、正月、祭り、お盆と年三回あり、その日だけはおいしいものが食べられました。それにしたところで、今日に比べると、まだまだ良くなりました。また、子供のおやつと言うと、今のようには種類がなく、ジャガイモ、さつまいも、かきもちくらいで、食べられるだけ良い方でした。

戦中、戦後においては、着物でお寺の子供さん、神社の子供さんと、すぐにわかりましたが、今は少しも違います。どこかの家皆さんもきれいな着物を身につけています。

今、私に戦後の生活をしろと言われても、衣食住すべてが良

くなり、それに慣れてしまっていて、できないと思います。また、今日の子供は、すべての物が豊富にあり、大変幸福だと思います。

私達には青春時代という言葉はありませんでした。もう二度と戦争はしてほしくありません。子子孫孫永久に、戦争はいやだと、この文章を書いていて更に強く思いました。

長々と行列して

橋本 愛子

私達の戦争時代は、日支事変から大東亜戦争と、戦いの明けくれでした。毎日、出征兵士を送り、送られる人。そのまま長の別れとなる人もありました。戦時中は、食べるもの着るものすべてが配給と闇でした。とてもつらい時代でしたが、戦地の皆様の苦勞を思い、皆一生懸命でした。

昭和十八年二月八日より二年足らずで終戦を迎えたのですが、食料難は戦時中よりひどく、配給日には長々と行列して少しの品物をもらって来たものです。塩水を海まで行ってびんにつめて来たことなど思いますと、今は物があります。それでもまだ不足だと、今の子供達は言います。戦争を知らない子供達に話してもわかるはずありませんが、うちの孫は、たまに、じいちゃんのアルバムを見て、「じいちゃん、鉄砲持ったがね」と話しています。

戦後のような辛いみじめな生活は二度と子供や孫達にさせてはならないと思います。そして、素直で思いやりのある人間に育ってほしいと思っております。

戦中・戦後の生活

—母さん、戦争ってどんなこと?—

山敷 正雄（旧姓・上河原） 当時二十三歳

大東亜戦争、始まる

それは昭和十六年十二月八日、米英国を相手にしての戦争が始まった。大東亜戦争と呼んだ。はたして、小さい日本がこの戦争に勝つことができるだろうかと思った。でも、私達の小学生時代の教育は、男なら兵隊で、女の子は従軍看護婦になるように教えられた。それを空想に画きながら通学したものです。

今までの日清・日露・上海事変・満州事変、どの戦も負けしらずの日本でしたから・・・。「日本大勝利」、「万歳」「バンザイ」で沸き立っていました。昼は旗行列、夜は提灯行列で、しかも戦地で活躍している兵隊の家の前へ来ると、同じく「万歳」で励ますのが毎回でした。

母さん、戦争ってどんなこと?

私は母さんに尋ねました。「戦争とはどんなこと?」。母さんはこう答えました。「何事も天子様（天皇陛下）の御言葉通りですよ。天子様の御声は神様のお声ですから。」と。

さて戦争とは、

ある方が言いました。

イ・戦ったら必ず勝つこと。

ロ・国と国とのおおげんか。

ハ・他国の領土を自分の国のものにする。

ニ・兵隊を殺し、武器や弾薬をなくする（こわす）こと。

その他、色々と考え方はあるかもしれない。でも、私の考え方は少し違う。

「戦争とは物資力と精神力との闘争である。」これが戦争だと思ふ。

さて、この大東亜戦争では何十万人となく陛下のためにと心に秘め、戦いながら、若き青春を国に捧げた。

敗戦

時は来ました。戦の効なく遂に、昭和二十年八月十五日。それは今迄に考えられない出来事が生じた。敗戦でした。日本は負けた。終戦を告げる天皇陛下の御言葉が、ラジオを通し日本国中へと流れた。全国民が途方にくれた。泣いた。ある者は気が狂った。自殺した者もいた。放送日、空はどんよりとした灰色の模様と化していた。つい昨日までは戦争に勝つために供出、供出と軍隊に送った。今では留守を守った家には食べ物がない。これからは自分の命を守るために食べ物と復興への気力の戦いはじまった。

配給の時代が来た。米・芋・いろんな物の配給があった。なかでも、数の少ない手袋やタオルの配給は三十人に一人くらいの割合で、しかも抽選で当たりを決め、皆、取り合いをした。

次にヤミの時代が来た。何でも手当り次第、食べるために家の品物と食料または塩との物々交換をした。皆、竹の子生活

へと変って行った。ポツポツと終戦一年が過ぎた。

復員

戦地からの兵隊さん達の復員が始まった。今迄の輝かしい戦勝であれば、町や村を挙げて兵隊さんを迎えに行った。「バンザイ」「バンザイ」、続く限り大きな声で歓迎した。日の丸の旗一色で旗や人の波で沸きかえった。それとは反対に敗戦・・・そして復員。誰れ一人の迎えもなく、家族の淋しい迎えのみで静かにわが家へ帰るのでした。同じ国のためにつくしながらも・・・。

そして復興へと

それから幾年・・・あれから幾年。

さみしい配給の時代も去り、国民の力で国土復活への時代へと進んだ。

日本復興への時代へと・・・。

戦う力を失って 敗戦前後と軍隊

軍隊は、もう国内・国外をとわず、日本を守る力を失いつつありました。

神風特攻隊による絶望的な攻撃で若者の命を散らしていく一方で、南の島々の重要な地点で日本軍は悲劇的な敗退と全滅をくりかえし、マラリヤと飢えになやまされていきました。

武器は不足し、飛行機も燃料もほとんどなくなっていました。その上、食料不足と病気が加わって、戦う力は極端におちこんでいました。

日本の本土でも、わずかに残った飛行機や軍かんを、本土決戦にそなえて、どこかにかくしておこうとすることもおこなわれました。

七尾湾へも日本海軍の残った軍かんのうちの何せきかが入ってきました。

田鶴浜町の相馬地区では、主として朝鮮人を使って、田んぼをつぶし、山をけずって、ひそかに飛行場が作られています。

そして、相馬小学校の一部や、近くの高階小学校にも軍たいが入るといふ状況で、能登の静かな山あいの村までが、戦場になるための準備がされていたのです。

だが、全体としては、圧倒的なアメリカ軍の前には、どうすることもできませんでした。

大ほうはみせかけて太い木、とべない木の飛行機・・・などでアメリカ軍をごまかそうとしたり、本物の大ほうがあっても

弾がたりない状況でした。

空しゅう、工場破壊、武器の不足、食料不足など、日本は戦う力を失ってしまいました。

一九四五年（昭和二十）八月十五日、日本は連合軍に無条件降伏をしました。

ここでは、こうした状態で国内、国外で戦った兵隊さんのようすが「四編」の体験談の中に語られています。

宇都宮飛行場にいた次兄（当時十四歳）

宮下 政則

一 みじめな整備兵

学校を卒業すると同時に、宇都宮下津郡清原村の宇都宮飛行場に整備兵として、昭和十九年から二十年秋までいた。

最初のうちは食事や衣服もかなり良かった。軍靴や小銃、給食等、また間食も与えられた。だんだん戦争が激しくなると、ご飯が粥になり、さつまいもや里いもになった。しかも、それは腐った、とても食べられないものだった。

靴が草履になり、わらじに代わっていった。冬になると、足の感覚がわからないような寒さだった。寄宿舎は粗末なもので、ノミ・シラミが多くて眠れなかった。

二 苦しい整備

練習機が一度練習飛行すると、その都度整備しなければならぬ。タンクのガソリンを勢いよく吸い上げて、胃の中まで入ってしまった、一日中くさい息をしながら苦しんだこともよくあった。また、格納庫から飛行機を出す時は、十五人ぐらいで押しながらか出すのだが、重くてなかなか動かさずひどかった。

終戦の年になると、空襲の危険にさらされ、ある時などは空襲だという声と同時に、ドラム缶を隠せとの命令で、ガソリンのドラム缶を、上空から見えない所まで転がして運ぶことになり、一人に一缶ずつ転がすのですが重くて動かぬ。やらなければたたかれるから動かないなどと言っておられない。本当に

ひどかった。

三 帰らぬ特攻隊

特攻隊に乗って飛びたつ人を何人も見送った。上級の人で、片道だけの燃料を入れ、もう帰らぬ人となる人を皆で並んで見送った。悲しいなどというものではなく、全員奮い立っていた。

四 偽装飛行機

戦争も末期に近づくると飛行機もなくなつて、竹をさいて飛行機の形に編み、布や紙を張ってペンキを塗り、松の枝を立てかけてカバーし、飛行機がまだまだたくさんあるかのように見せかけたとのこと。

五 終戦の当日

終戦の八月十五日、全員飛行場に集合との命令で並んだ。何が何だかわからないうちに寄宿舎へ帰ると、戦争に負けた、降参したのだという天皇陛下の放送があったということがやっと分かった。黙ってしまう人や泣き出す人、くやしがつて怒る人、うそだと言って信じない人もいた。

六 持ち物の整理

それから何日過ぎたか忘れたが、米軍が進駐して来るというので、身の回りの物を整理してみな燃やすことになった。飛行機に関係した本、今までに勉強した本やノート、メモ帳など自分の毛布一枚残してみな無くなった。

今から思えば、あんなにまでしなくてもよかったと思うが、恐ろしかったから言われるままにしたとのこと。

帰るころは栄養失調で誰でもそうだろうが、やっと家へたどり着いたという感じだった。

—次兄から聞いた話—

私の戦争体験記

上坂 多喜雄（当時二十二歳）

一 満州から中支へわたる

私は現役で水戸通信部隊へ入隊、半年の教育を受け満州へ渡りました。満州では仮兵舎を転々とし、半年ほどたってから「部隊創立」で新しくできた部隊へ転属になり、中支へ移動になった。

貨物列車で馬でも送るように積み込まれた。この列車は臨時列車で、定刻の列車のじゃまにならないように時間の間を縫って走っていたため、約一カ月もかかって中支の南京に着きました。

二 シラミの旅

一カ月も風呂に入っておらず、皆の体は臭いにおいがする程度でした。南京で下車し、城外の飛行場の兵舎に着いて休んだとたん、かゆみをおぼえ、シャツを脱いで見ましたら、体はつぶつぶに赤くなっている。よく見ると、シャツの縫い目に盛り上がるように「シラミ」がずらりとめぐり込んでいるではありませんか。思わずこれを見て寒けがしました。

これは皆同じでした。すぐさまコンクリートに広げ、トンカチで打ちつぶしました。それからもまだ残っておるので風呂の湯を暑く沸かして身ぐるみ脱いで、湯の中へ入れて炊きました。これで万事OK。

三 ブタ放牧場の中で

この兵舎で一週間ぐらいして、私達の部隊は出発しました。そこから十キロ程離れた駅まで行軍し、駅に着いた時は夜中でした。列車は来ておりません。いつ来るかも分かりません。

駅の裏の田んぼの中に部隊は集り、そこで夜営するここになりました。各兵おもしろいおもしろい田んぼの中に休みました。皆ぐっすり寝たのでしよう。目が覚めた時には、日は相当高く上がっておりませんでした。よく見ると、田んぼと思ったのは田んぼではありませんでした。ブタの囲い場だったのです。糞だらけ。糞のために田んぼのように思えたのです。軍靴も軍服もあつたものではありません。こうなると、今まで気が付かなかったことが一変して匂いが倍増し、臭くて臭くてたまつたものではありませんでした。

★シラミ★

今はいなくなつたが、人間の血をすって生きている寄生虫。かまれると、かゆい。

大東亜戦争を顧みて

上坂 多喜雄（当時二十四歳）

戦争は食料不足になる

むかし、昔。と言ってもそんなに遠くはないが、小さな日本は、世界を相手にして戦い、食べる物もなくなり、最後は敗戦という悲惨な目に合っていました。

日本の国内の混乱と、戦争に使い果たした物資不足の時に、私は日本に復員して来ました。

さかのぼって中支の武昌飛行場に従事していた時の頃、部隊では食料不足のため荒地で「アカザ」や「ズンベラ」などを取って料理をして食べましたが、青くさくてまずく、ただ腹をふくらませるだけ。またこんな事もありました。ご飯といっても米一合に、そら豆が一升でまるでそら豆にご飯をくっつけたよう、本当に食べられたものではありません。このそら豆つきご飯をかんだ時、そら豆に小さな穴があり、その中に虫がいて、かんだ時グシツとにじみ出ます。それでも虫と一緒に食べたものです。

復員の時―

敗戦後私達の部隊は、武昌飛行場から漢口飛行場に移動してから間もなく敗戦の知らせがあり、それから漢口の兵舎の明け渡しをくって、兵器類は全部没収され、部隊は荒野にほうり出されてテント生活が始まったのです。

この日から復員命令が明日くるか、明後日くるかと、来る日

も来る日も待ち続けました。やがて、復員命令が出て、揚子江の船付場まで行き、船の来るのを今やおそしと待っているうちに夜に入りました。仕方なくここで一夜を明かすことになった。この船付場は指定の船付場とちがって臨時の乗り場ですので、家もなく何もない所です。近くに土かべの小さな家があり、その時はすでに真つ暗でした。

私達はこの家で露しのぎのつもりで、レンガのかけらでガラガラな所で重なり合って一夜を過ごしました。朝起きてびっくり、この家は、火葬場だったのです。レンガのかけらと思っただのは、火葬の人骨だったのです。

それでも露をしのぎ、一夜をゆっくり休ませていただいでよかったですと思いました。

その日、船が来て復員できました。

軍隊生活をふりかえる

延命 禎二（二十歳）

おじいさんから聞いた話

おじいさんは、昭和十九年十一月に金沢の重機関銃中隊に入りました。おじいさんには日本の戦っている戦争が、良いのか、悪いのか分かりませんでした。でも、日本のために死のうと考えました。

中隊には、馬が居て夕方になると、馬の手入れが始まり、風呂には行けません。また、毎日毎日演習で大変でした。しかし、あまり苦しいとは思いませんでした。それは、演習が終わって中隊へ帰ると、上級の兵隊が、初年兵は少しも反対できないのを承知でいじめるから、演習の方が楽なのです。上級の兵隊も、家に帰れば良い人達でしょう。良い人達でも少しでも権力があると、このように変わるのかと悲しく思い、そして、おじいさんは他人の痛みが分かる人になろうと決心しました。敗戦になり、民主主義の世になったのだから、もうこんなことがなくなると思いました。

労働組合も軍隊と同じ

でも、七尾のセメント会社に勤め、労働組合に入ると、軍隊と同じ事が起こりました。幹部の人達は、労働組合は団結すべきだと言って、一般の人達を規則で縛り、また、統制違反だと言って処罰しました。

この人達も、家では良い人達なのです。どうしてこんな良い

人達が、軍隊に入れば天皇陛下のため、組合に入れば労働者のためと言って、下の者を支配するのでしょうか。

人間とは、少しでも権力があると、その権力で弱い人を縛るのが好きなのでしょうか。悲しいことでもあります。

それでも、今の日本は、世界でも一番自由な良い国だと思つて、喜んでおります。

★中隊★

兵隊の集団で、一番少人数が分隊（十五人）で、次が小隊で四カ分隊の集り。さらに、それが四個集まった集団を中隊といえます。二百四十人ぐらいです。

捕虜となつて 收容所生活

日本が太平洋戦争で敗れたとき、海外には約三百万人をこえる日本軍が北は満州・千島の北端から、南はジャワ・ソロモン諸島まで、東は南太平洋マーシャル諸島から、西はインド洋のアンダマン諸島に至る、地球全表面積の十五分の一に及ぶ広大な地域に展開していました。

日本が連合軍に降伏したことにより、持っていた武器は全て取上げられ(武装解除)、ほりよとして收容所に入れられました。いろいろときびしい取り調べをうけましたが、ようやく許されて、なつかしい日本に帰ることができました。

そんな中で、ソ連軍によって武装解除された日本軍約六十万(満州および北緯三十八度線以北の朝鮮にいた日本軍)は、そのままソビエト領のシベリアの收容所へつれていかれました。日本軍の各部隊の人数をきびしく調べたソ連は、人数がたりないと兵隊ではない一般の日本人の男子をつれてきて人数をあわせ、シベリアへつれていったといわれています。

シベリア、それはソ連の北にひろがる大平原であり、冬はマインス四十度以上にもさがる、きびしい気候の土地です。

ここで、一日わずか三百五十グラムの黒パンで、材木の切り出しなどの重労働をしなくてはなりませんでした。

ほりよとなった日本軍は、栄養不足・手足もおおるきびしい寒さ、そして体力をつかう仕事と、条件がいくつも重なって、たくさんの人が病気になる、死んでいきました。

この章では、こうしたシベリア收容所のほりよ生活について、実際の体験記録がよせられています。

朝鮮よりシベリヤへ

今井 良江（当時二十七歳〜二十九歳）

一 日本兵は捕虜

昭和十四年一月、郷土金沢の歩兵部隊に入隊して勤務していたところ、昭和十六年十二月より大東亜戦争となり、各地に転戦し、昭和二十年八月十五日、日本軍は連合軍に対して無条件降伏して、昭和二十二年十月なつかしい故郷に帰国するまで、約十年間、異国の土地に収容所生活を送りました。

終戦時は、朝鮮平壤部隊の輜重兵連隊本部におりました。直ちに朝鮮出身の兵隊は全員故郷に帰国させました。

日本兵だけが、捕虜になったわけです。

二 兵器没収

八月二十七日、無敵とほこりを持っていた日本陸軍部隊も、連合国ソ連軍により武装解除されて、私も軍刀とピストルを取り上げられて無腰となり、あわれな姿となり、思わず国の両親の顔が目に浮かび、言いあらわしような寂しい心となりました。

平壤市郊外にある飛行場に、九月二日に集合を命ぜられてその兵舎に集合しました。

それからは、ソ連兵の監視のもとで、一步も外へ出ることもできない捕虜収容所と早変わりして、この日から与えられた粗末な食事、衣類等で、帰るまでの二年間、捕虜生活をおくりました。

三 捕虜の部隊組織

ソ連軍の指示により、部隊が編制されて、一中隊が二百四十名。うち四カ小隊よりなり、一小隊は六十名。小隊は四カ分隊よりなり、各分隊は十五名です。

終戦後も旧陸軍の階級はそのまま、復員するまで階級による集団生活を送ることになり、私も小隊長となり、各種の作業に従事しました。本当につらい二年半でした。

四

二十年十月、北朝鮮興南の港へ部隊の移動を命ぜられて、波止場より貨物船の積み込み作業で、毎日毎日同じ作業の繰り返しでした。

ソ連軍に押収された物資は、言うまでもなく日本の国民の血と汗の固まりです。それをソ連本国へ向けての船積み作業ですが、私達は捕虜ですから何も言うこともできません。この作業は翌年の二十一年六月まで続きました。その間、収容所を朝七時に出発し、夕方六時に帰る日課でした。波止場まで二キロメートル程の通りですが、ソ連兵の監視付きです。

道中よく日本人引き揚げ者に合いましたが、口もきけずあわれなものでした。捕虜は人類の最低の生活であり姿です。子孫にはさせてはならないと心に誓いました。

五 ウラル山脈を越えて

二十一年六月に部隊移動を命ぜられて、シベリヤの玄関口、ウラジオストツク近くの軍港に上陸させられ、七月上旬の暑い最中、強行軍させられて、今度は貨物列車でシベリヤ大陸を横断して、ウラル山脈を越え、ヨーロッパのウクライナ地区まで、約二十五日間、汽車の中でした。

八月からスラビヤンスクの收容所に移動しました。ここでは、ドイツ・ルーマニヤ人の捕虜も同居でした。

六 栄養失調

ソ連本国に收容されるようになってからは、ますます食事給養が悪くなり、部下は体が衰弱して栄養失調になる者が続出して幹部として本当に困りました。

ソ連軍のノルマと兵隊の体を見れば何も言えません。意見も通りません。世間でよく言う地獄のような生活でした。

二十一年の冬はウクライナ地区で過ごしました。

道路作業。工場の雑役。農場の手伝い。山林の伐採等、指示の通り部下を連れて各所へ作業に出ました。その時は指揮者としては最年少でしたのでよく使われました。

足を引きずって收容所に帰れば、君の部隊は能率が最悪だと言われては、よく牢に入れられました。

七 Dクラスのお蔭で復員

希望のない生活です。新聞も週刊誌もありませんし見せてはくれません。ただ生まれた故郷をしのんでは作業を続けている間に、二十二年の六月には、部隊の約八十パーセントの兵隊が栄養失調で体力がなくなり、作業ができない状態となり、收容所に訴えました。すぐ体格検査があり、A B C Dの四ランクに分けられました。結果は殆どが、C Dクラスになり、部隊の編制替えがありました。そして、私はDクラスの兵隊で編成の中隊長を命ぜられました。

この編成替えのお蔭で、私は無事に日本に帰ることができました。

もと来たウラル山脈を越え、シベリヤを横断して、ナオトカ港より乗船して、二十二年九月二十七日、舞鶴港に上陸できました。思えば長い長い、悪夢の生活でした。

★捕虜★

戦争をしている時敵に捕らえられ、自由な権利を奪われた兵士のこと。

朝鮮や満州にいた軍隊が無条件降伏のため、ソ連の捕虜となつた。その数ざつと六十万人。

ボルネオ島 パリックパンで

高柳 貞次（当時二十三歳）

一 降伏

昭和二十年八月十五日、戦争が終結しました。私達は八月下旬にボルネオ島の現地で武装解除されました。その時の連合軍側の警戒は非常に厳しく、カミソリ一丁針一本といえども、私達の所持を許してくれませんでした。（日本人が切腹するから、自殺するから、との気遣いからです。）

私達は所定地域に集められ、毎日の作業は自分達の居所の回りに鉄条網を張り、外部へ出られないようにするためです。すべて自由を束縛され、囚人の如くで、負けた惨めさ、悔しさを心に秘めながら作業に従事しました。

二 わずかな食料

焦土と化した現地では、むろん食料は不足しています。

連合軍より支給される米は、一食約三十CC常夏の国でありますから、年中草木の芽を摘み、海辺より海草を採り、塩の代わりに海水を汲み、これで雑炊を作って、飢えをしのぎました。私達は、俗に米のスープと申しております。

三 煙草にひかれる

また煙草はなく、連合軍兵士ののみ捨てるのを、鵜の目鷹の目で見、捨てるどまるで蟻が蜜に群がるように駆け寄り、吸い

がらは泥にまみれて、誰もものむことができない状態になってしまいます。兵士の中には適当な草の芽を摘み、それを乾燥して煙草のようにしてのみ、命を落とす人もおられました。いずれにしろ「衣食足りて、礼節を知る。」古語の如く、世界に誇りし日本帝国海軍軍人の姿、また哀れであります。

四 日本人への評価

一段落いたしましたから、連合軍のキャンプへ雑役に行き、彼等と交流するにつれて、日本人を高く評価し、「日本は戦争に敗れましたが、世界の一等国民であります。あの小国日本が、世界の大国を相手に長い間戦いました。世界のどこに、そんな立派な国がありませんか、胸を張って歩いて下さい。」と、励まされた時、「日本は戦争に負けてよかったのだ。勝っていたら鬼畜の如き行動をしたかも知れない。」と語りながら、日本の復興を互いに誓い合うのであります。

第二次世界大戦がなかったら、日本はどうなっていたでしょうか。おそらく一小島民族として、哀れな運命を辿っていたことでしょう。大戦は、世界各国に大きな反省と転機をもたらしたのです。

五 天皇の命令

天皇制に幾多の批判はありますが、あの敗戦時、天皇の命令

がなかったら、大部分の軍人は現地に止まり、または自決して、故国の土を踏まなかったのではないかと想像されます。

天皇の命令により、整然と復員し、日本の復興に寄与したればこそ、経済大国日本の今日があり、これを契機に各地の植民地が独立し数多くの自由国家が誕生し、日本への依存度も増し、その評価も一段と昂揚せられ、今日にいたったのではないでしようか。

二度と繰り返しはならない、戦争の懺悔を「転禍為福」（わざわわいてんじてふくとす）永遠の発展を願うものであります。

★連合軍★

第二次世界大戦中日本、イタリア、ドイツなどの枢軸国に対して連合して戦ったアメリカ、フランス、中国やソ連、その同盟国の軍隊のこと。

はるかな故国への道 海外からのひきあげ

一 海外に六百六十万

一九四五年（昭和二十）八月十五日、日本の無条件降伏によって、第二次世界大戦は終わりをづけました。

しかし、すべての地域での戦闘が終わったのではなく、停戦命令が十分に伝えられないところもあって、十五日がすんでも、はげしい戦いが続いたところもありました。

そんななかで、敗戦を海外でむかえた日本軍および一般の日本人は、およそ六百六十万人の多くを数え、軍人と一般日本人のかずはほぼ同数で、全アジアにおよんでいました。

二 恐怖と死と

ようやく戦いも終り、日本への引きあげがはじまりましたが、海外で敗戦をむかえた日本人は、日本本土の人とくらべて、はるかに悲惨な状況におかれました。

引きあげの状況は、軍人と一般の日本人とではかなり異なり、軍人の引きあげは比較的スムーズに行われましたが、何の組織も持たない一般の日本人にとって、引きあげは長く苦しい道のりであり、そのほとんどが着のままで、祖国にたどりつかねばなりませんでした。

とりわけ、ソ連軍の管理下におかれた満州や北緯三十八度以北の朝鮮にいた日本人は、「地獄」としか表現のしようのない状態にあったのです。

これまで支配されていた中国人や朝鮮人の、日本人への憎し

みの爆発。混乱の中での略奪・暴行・射殺・病気・餓え・死・三十八度線のカベ……。そして、ほりよとなった日本軍のシベリア収容生活と……。

それらは、まさに恐怖と死の中におかれる毎日だったのです。

三 いま、問われているもの

引きあげは、どの場面、どの状況をとらえても、戦争のもたらしたもう一つの大きな悲劇であったのです。

今日、なお中国残留孤児の問題が心をゆさぶり、横井氏や小田氏の例を見るように、南の国のジャカルタのなかで、戦争が終わったことを知らずにいる日本兵の存在など、戦争の傷あとは、今も大きく口を開いています。

これらの例を、たんに戦争の後い症や、あとしまつの問題にすりかえてはならないはずです。

人類にとって、「戦争」とは何か、「平和の尊さ」とは何か。人類の生存にかかわる問題として、私たちは今一度、これらの体験記録が問いかけているものを考えなければなりません。

海外からの引きあげは敗戦後から五年間に、その大部分を終えました。途中、一時の空白期をはさんで、昭和三十四年ごろまで続きました。

引揚げ当時を思う

中村 喜久男（当時三十五歳）

一 満州から

私は昭和二十一年七月十五日、旧満州国から妻と二人の子供をつれて、丸裸同様の姿で引揚げて来ました。

満州には、約七カ月間生活をしてきたが、昭和二十年八月十五日、正午のラジオから聞こえて来た終戦宣言ニュースに、それまで平穏で明るい町も一辺して大変な事態が起きた。

それは、永年日本政治に対する不平を持っていた五族の内、次の民族の不平等分子が暴動を起こしたのである。それは満人、漢人、蒙古人、朝鮮人である。かれ等は、日本人商店街を襲撃し、諸物資の略奪をはじめた。私達日本人は、只これを遠くから眺めるばかりで、ちよつとでも手を出そうものならば、留置場行きになるのである。私達は一時の食糧を確保はしているが、長期の食糧に心細くなり、みんなでいろいろと相談をしている時に、幸いにも九月に入ってから、日本人の世話人会から食糧の配給がなされたので、一応は心配が解除されたが、八月二十三日と二十九日に、当時の八路軍（現在の中共軍）とソ連軍が入城して来た。又、両軍が入城と同時に、市内には問題が起きた。それは日本の元軍人で憲兵とそれに警察官、刑事をしていた者を逮捕せよ、との指令がでたので、朝夕を問わず軍用ジープが市内を走り、全家庭に強制捜査の手が廻って来たので、男子はおちおち家にも居られない有様であった。時にはジープの音を聞くと急に野原に出て草原に身を伏せて、一日中空を見上げて寝ころんで時間を過ごす始末であった。

また、兵隊は銃剣を突きつけながら、若い女性をだせと、これ又朝夕しつこく要求に訪れて来るのに、私達男子はこれら要求に対して一件を案じて、全婦人の髪を男子の様に短く切り、服装も男子服を着用させると共に、子供もない婦人には二人以上の子供を持っている者から一人を借りて、自分の身を守るようにしたので、幸いにもつれ去られる事はなかった。

二 引揚げ船

昭和二十一年五月に入ってから、引揚げのニュースが聞かされるようになったので、その準備をなしていると、当局からの依頼は、夏冬二着と下着は衣類に合わせてとの指令が来た。私はいこれらの品物をリュックサックに詰め、外に毛布一枚をリュックに結束して準備を整えた。

五月二十日泰皇島から懐かしの日本に帰国出来ると言うので、錦洲郊外の小さな駅前に集合させられ、先ず持物検査と身体検査が厳重に実施されたが、若い検査官が検査を名目に自分の気に入った品物があれば没収するにはいらだちの心もあったが、我慢の一字で検査を受けた。

五月二十一日泰皇島から米国の上陸用舟艇で出港したが、船も小さく船底にアンピラ（ゴザの一種）を敷き、全員ごろ寝の船旅であった。途中一番難関である玄界灘の荒波に木の葉のようにもまれさながらの進行である。船酔いも沢山出たが、船員の手厚い看護で、一応は平穏であったが、五日間の船内生活に

幼児ばかりでなく、大人にも病気になる人が出たし、幼児が急性肺炎で二人とも死亡した。佐世保の港湾管理部の中で火葬され、遺骨は親が持ち帰る一幕もあった。

三 上陸の許可

その後、上陸の許可が出たので、全員元気に上陸したが、海軍兵舎に収容されて健康検査や持ち物の検査消毒が実施されたが、満州から持参した金額調査が行われた。数万円を持参した人もそれ以上の人も一律一人千円以上は没収との強い指令であったし、又、貯金通帳や証券類も全部没収には、苦勞して貯蓄をした金額も政府の強い指令に没収される事に怒りも覚えたが、命令とあれば仕方がない事と思つた。

四 引揚同盟会

只、これから故郷に帰つて生活が出来るのかと、心配の種であつた。

私達はこれを期に引揚者同盟会を結成し、政府に対して満州国に残して来た財産の保障運動をお越し、昭和三十年頃に少額ではあつたが壹万円の保証金が交付されたが、これも大人に対しての金額であり、小人に対しては五千円で十年還付の公債の支給であつた。

物価高と職業もない毎日の配給も十分に手に入れる事も出来

ない日々であつた。

今、引揚当時を思い出してペンを握るとあれも、これもと書きたくなるが、四十年近くもたつと忘れかけて来たことが多い。戦争こそ人生を狂わし悲惨を生む第一の要ではないだろうか。日本政府が軍備の拡張を計り、米国の要望に応えようとしているが、私達の味わつた悲劇を子や孫に味わせたくないものと願うものであります。

今日満州国に残留孤児として大勢いる事をニュースで聞く度に胸の痛みを覚える。私はなんとしても世界が平和であり、軍備の拡張を抑制し平和な日々を送りたいものです。

復員時を思う

久乃木 山口 貞吉（出兵当時十九歳）

昭和十四年広島宇品港より朝鮮ラシン港に上陸、満鉄にて関東軍第二大隊に入隊。昭和十四年十月十一日、北とう山にヒゾク軍と約一時間そうぐう。翌年十五年五月内地転属金沢第七連隊に入り、その年第七連隊七尾港より渡満いたしました。小生等は留守部隊第七連隊となる。その後色々隊役に従事致し作業員として工兵隊へ三ヵ月派遣。その後帰隊後、補充兵の教育、初年兵、色々兵隊教育に当り、昭和十六年除隊満期致し、家で約五ヵ月で第二次世界大戦のため旧の越路村に七十名の大召集があり、久乃木に七名来ました。そのうち小生の兄（堂本周蔵）と二人に赤紙がきました。間なし十日以内で兄が一日おくれましたが、その当時は村民上げて送りがあるので、高柳ひとしさんと三人、徳田駅まで送ってもらいました。

入隊後兄と小生は別々にわかれ、任地も判らず、小生は広島宇品港から南洋諸島ポナペ島上陸。それは、空じゅう爆撃、艦砲色々あり大変でしたが大した事なし。

・戦争が終わって

終戦の年十二月、浦賀港に来て見るも聞くも非常に大変な事だと思ひ、一日も早く家に帰りたい。いったい家の方はどうであらうかと案じるのです。宿舎には三日程だと思ひますが、上野駅まで来ましたら駅構内には、スキ間ない程に、それから上野公園の方にも戦災にあった気の毒な人でした。何を見ても気の毒な風景ばかりでした。

その中金沢行の列車にのつたとたん、ある男の人が突然復員して来た小生に言ったことばは「お前らのために日本は負けたのだ。」と言って怒言する、又、その他の人は「そうではない、自分の命を捧げて国のために働いた大恩人だ。」と言って列車の込む中で大変でした。

いよいよ列車は金沢、徳田駅と来てしまったので、出征する時は村民上げて大かん送、帰って来てみれば出迎えは一人もなく、ただ妹一人、高柳さんのお母さんと二人で帰家致しました。

小生の兄妹七人、そのうち一人の末妹残し兄二人は中支作戦、弟は満州一人、朝鮮一人、妹は看護婦、このように皆国のため命を捧げた一家でした。その時二人の弟はソ連にいて一人一人別々に帰って来ました。

それ以来小生等兄弟は世のために、それ成りに一人一人が尽くして来たが、姿なり、動きをして、是れと言う事は、今もつて何一つありません。

戦争を語り継ぐ

子どもたちのききとり

戦争が終わって四十年近いとしつきが流れました。

戦争を知らない世代も全人口の過半数をこえてしまい、目の前からはいまわしい戦争の跡はほとんど姿を消してしまいました。

そんななかで、わが国の国防予算の伸びは、他の生活関連項目を圧して、大きくなり続け、自衛隊はアジアでは最強の軍隊の一つになりました。

世界では、原水爆の貯蔵量は約五万発以上といわれ、人類を全滅させてもまだおつりがくるほどです。その中の数百発が使われただけでも、まきあげられた土や煙、放射能が地球の上空をおおい、太陽の光をさえぎって、気温は十四度から二十度以上も下がる「核の冬」がやってきて、人類だけでなく、生物の大半は死に絶えるだろうと警告する学者もいます。(数十発でもそうなるという人もいます。)

恐怖を希望にかえ、子どもたちに明るい未来を保障するのが今の大人の役目です。そうであれば、子どもたちに「戦争を語り継ぐ」ことは、とても大きな意味があります。

この章にのっている子どもたちの「聞き取り」の記録は、一つ一つは小さなものかもしれませんが、戦争を語り継ぐという意味で、とても大きく、重いものを含んでいると思います。なによりも、自分たちの未来を見つめる確かな目を持つための第一歩となる可能性を期待させるからです。

子どもたちに戦争を語り継ぐこと、それは、「いま」を生きる

私たちが大人の大きな責任でもあると言えるのではないのでしょうか。

おじいちゃんとおばあちゃんの戦争体験

高柳 克典

おじいちゃんは第二次世界大戦へ召集をうけたのは、昭和十八年九月（二十六歳）のことで金沢の歩兵第七連隊で、今の金沢大学構内でした。軍隊での生活は大変厳しく、全く自由がなくその年の九月中旬に広島の宇品より戦艦「伊勢」にのり一週間かけてトラック諸島の一つ「ポナペ島」へ配属されました。島は常夏で一年中「下着」一枚ですごされ、バナナやパイナップル、ヤシの実などが比較的自由に食べることが出来たが、主食は「サツマイモ」の雑炊で、自分らで取った魚ぐらいがせめてもの蛋白源であったそうです。しかし、戦友は日本の各地から来ており、それぞれの出身地の変わった話は聞くことが出来た。

敵機の空襲はほとんど毎日で、十九年の四月二十九日には、六十機編成隊の大空襲が最初で、その後の大空襲は日本の祭日めがけて来たとのこと。その後、一昼夜にわたる艦砲射撃をうけ、命からがら防空壕から逃げ出したこともありました。

一 終戦と引あげ

二十年八月になり軍本部より終戦の知らせを受けて日本へ帰るため米国の輸送船「リバ艇」に乗船したのはその年の十二月初旬のことで、緑の日本を見た時は生きて内地の土地を踏めたことに大変なよろこびを感じたそうです。そして、戦死した友達を思うにつけて、こんなむだな戦争は二度と起こしてはならないと思ったそうです。

二 供出と配給

おばあちゃんは、戦争当時は二十四歳で家では農業をしていましたがおじいちゃんが戦争で応召したため、おしゅうとめさんと二人で農作業をしていました。田んぼに取れた米はすべて供出してしまい逆に配給を受けていたのですが、量が少ないので、「おかゆ」にして食べたり、鉄砲の弾に使うと言って鉄のナベ、カマまで供出したそうです。着物などもみんな切符で配給のため、子供に着せるものなどを作るのに苦労したとのことです。

三 空しゅう

当時服装は防空ズキンにモンペ姿でどこへ行くのも同じ格好で、夜などは空しゅう警報のサイレンが鳴ると、電気を消し、いつでも逃げられるように身のまわりのものを整理していました。

二十年八月になり「隣保班」の当番になり町内を寝ずに警ら中、夜中の十二時頃、突然B二十九一機が輪島の方向へとんで行き、後ろから来た編隊は全部富山の方向へ向かい大空しゅうが始まりました。地上からは、サーチライトが飛行機をとらえるのですが、味方の飛行機は一機も見えず爆弾の投下するのが見えるぐらいものすごい爆弾だったそうです。

八月十五日に「無条件降伏」したと知らされ、この後どうし

金沢のおじさんから聞いた戦争のはなし

築山 貴志

て生活して行くのか大変不安であったとのことですが、現在の日本の姿と比べて見て、余りの違い（当時と）に逆に不安感を覚えていると言っていました。

戦争は、国と国が色々な事情があり起きるのですが、大変不幸なことです。

戦争が起これば、外国から油や色々な食べ物が入らず生活に困ります。

第二次世界大戦が起きた時は物資が不足で日本国民が一丸となり、多くの若い男の人は戦場に行き、ぼくのおじいさんもフイリピンで戦死してしまいました。ぼくの父が一歳の時でした。大変残念なかなしいことです。

家に残った人は、年より、女、子供たちばかりで家を守り、農業に一生懸命で食糧増産にはげみ、中学生以上の学生や若い女の人たちは工場へ働きに行き、兵器作りお国のためにつくしました。

小学生は女兒はモンペをはき、皆ぞうりばきで、通学しても勉強するよりも、運動場や空地を利用して畑にして野菜やさつまいもなどを作りました。それでも食べ物不足して米の代用としても、むぎ、草まで食べたとのことです。

日本の多くの町は、空しゅうのため焼け野原となり、多くの人死んだそうです。都会の子供達は勉強する家も学校も焼けてなくなり、田舎の学校に父母と別れて転校して勉強したとのことです。

戦争は二度としてはいけないことです。今ぼく達は大変平和な日本に生まれ、いろいろな食べ物に恵まれ幸いです。

おじさん 金沢市 山本 良光

おじいさんから聞いたこと

岡崎 幸二

・在郷軍人

昭和十九年から二十年八月十五日、終戦前日まで在郷軍人として、一週間に一度あて訓練した。敵が上陸すると言うので、竹槍を持ちルーズベルトの人形を造り「ヤアー」と突くまねをした。今から考えると軍隊は何を考えていたのだろう。あまりにも幼稚なので負けるのは当然だ。

科学の発達した今日、戦争は絶対にしてはいけない。人類は死滅する。

★世界平和記念日（十一月十一日）★

第一次世界大戦（一九一四〜一九一八）が終結した日を記念して設けられた。世界平和を願う日。

戦争のこと

吉岡 麻実子

わたしのひいおじいさんは日ろせんそうに行つて、ロシア軍とたたかつてきんしくんしょうをもらいました。今も大切にしてお家にあります。おじいさんも軍ぞくに行つたしせんそうにも行きました。二年間で終戦になつてかえつて来ました。せん死された人もたくさんいられたそうです。

おばちゃんに聞いた話ですが、お父さんのかおもしらないで大きくなつた人や大切なお子さんをなくされて、さみしい生活をしていられる人がたくさんいるそうです。

せんそうをしらないわたしたちは、本とうにしあわせだと思いません。

おばあちゃんの若いころ

山口 聡美

戦争中の学校生活は、勉強は第二で畑仕事がおもでした。交通のようすは、自動車は木炭車が走っていました。

衣服は、つぎにつぎをあてていました。食べ物に米が少しであつたので、豆だとか、いもが主食でした。学校の運動場にもいもや麦などもつくつたそうです。

空しゅうけいほう、けいほうと知らせをうける時には、電燈のかさの黒い布をかぶせて家の中を暗くして町のあるのをわからなくして、子供は防空ずきんをかぶって、防空ごうにげたそうです。

話してくれた人 山口 はる

貴重な体験をたくさんお寄せいただき、ほんとうにありがとうございました。編集にあたっては、「越路の昭和史・資料編」として、できるだけ歴史的な時間の流れと、体験の内容とがみあうような形で編集をこころみしました。

職員室の窓から、かつて軍事教練もおこなわれた旧体育館や、食糧増産で一面のイモ畑となった運動場が見えます。

昭和十二年の日中戦争から敗戦までに、十五、六歳の少年兵を含めて、約七十五万の男子が出征し、そのうち二百三十万人が戦病死しています。一般の人を含めた死傷者の数になると見当もつかないといわれています。そして、日本人をはるかにこえるアジア人の人たちが犠牲になったのです。

越路地区からも多くの人が出征し、かえらぬ人もまた多数にのぼっています。

第二次世界大戦が終わって四十年がすぎました。しかし、今日の軍事技術の発達は、人類を何回全滅させてもなおありまらるようになってしまいました。

みなさまのおかげで完成することが出来ましたこの体験集が、ふたたび歴史の歯車を逆転させないために、そして、子どもたちの明るい未来を保障するために、きつと役立つであろうことを、またそうあるべきであることと念じつつ、編集の仕事を終えました。

ほんとうに、ありがとうございました。